公　益　財　団　法　人

日本中国国際教育交流協会

【2015年度の歩み　会報第22号】

■新たなプロジェクトへ　視察研修訪中団

■日本語・文化研修　第４回教育交流ホームステイ

■日中若者文化交流　第１回教育文化交流シンポジウム

2016年３月発行

■表紙写真
【左上】視察研修訪中団（山東省泰安市東平県学校視察）
【右上】第４回ホームステイ in 山梨（参加者・ホストファミリー記念写真）
【左下】第１回教育交流シンポジウム（記念写真）
【右下】視察研修訪中団（山東省泰安市東平県学校視察）

目　　次

■巻頭言　公益財団法人日本中国国際教育交流協会代表理事　黒田文男 …… 2

■視察研修訪中団（教育交流・派遣事業） …… 3
（１）訪中団実施要項 …… 3
（２）訪中団日程 …… 4
（３）訪中団参加者名簿 …… 4
（４）山東省東平県教育事情 …… 5
（５）訪中団報告 …… 6
（６）訪中団感想 …… 16

■山東省泰安市東平県音楽教育プロジェクト（教育交流・支援事業） …… 25
（１）2015年度教育支援に関する協定書 …… 25
（２）報告（東平県から） …… 26
（３）購入音楽機材一覧表 …… 26

■黒田代表理事ら中国を訪問（教育交流・派遣事業） …… 27

■第４回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流・研究等助成事業） …… 28
（１）ホームステイ実施要項 …… 28
（２）ホームステイ日程（例） …… 29
（３）ホームステイ・ホストファミリー・留学生名簿 …… 29
（４）ホームステイ・ホストファミリーからの報告 …… 30
（５）ホームステイ・留学生報告 …… 33

■第１回日中教育文化交流シンポジウム（教育交流・研究等助成事業） …… 42
（１）シンポジウム実施計画 …… 42
（２）シンポジウム内容報告 …… 43

■第11回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業） …… 46
（１）教育賞受賞作品　「声」　郭可純（中国人民大学） …… 46
「中日文化のつながりを構築しよう」　莫泊因（華南理工大学） …… 47

■資　料 …… 49
（１）会報「共生力」　22号、23号 …… 49

■機関関係 …… 53
（１）2014（平成26）年度事業報告 …… 53
（２）2015（平成27）年度事業計画 …… 54
（３）2015（平成27）年度収支予算書 …… 56
（４）2015（平成27）年度役員・評議員名簿 …… 58

■協会の歩み …… 59

■編集後記 …… 表紙３

巻頭言

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
代表理事　黒田 文男

公益財団法人日本中国国際教育交流協会の事業に対しまして、多くの方々より励ましやご支援を賜り御礼申し上げます。

日本と中国及び韓国の三国間の関係が、ようやく改善に向かい始めており喜ばしい限りです。国同士良好な関係を保持するためには、互いが其々の国の相違を認め、かつ、平和を恒久的に希求することだと思います。

基本は、「草の根」的な交流によって、信頼が醸成されるものです。つまり、人と人の交流を地道に行うことにあります。そして、それは誰もがどの国でも必要不可欠な教育という人格の完成を目的としたものによることが賢明であります。

当会の事業に当てはめれば、中国宋慶齢基金会との共同プロジェクトは、まさしく国を超えての人と人の交流ゆえ、得られる教育成果は多大なものがあります。

来年度からの教育交流、派遣事業は、河北省易県の先生方との交流の成果を基盤に、中国宋慶齢基金会と連携する中で、新たに山東省泰安市東平県の教育関係者との交流を始める予定です。すでに、東平県の教育関係者とはプロジェクトの内容について協議しておりますが、より良いプロジェクトにすべく尽力してまいります。

又、日本語作文コンクールで最優秀を受賞した学生さんや日本、中国の若者たちを中心に「日中教育文化交流シンポジウム」を開催し当会の役割と使命を幅広く知っていただく契機になればと願っています。そのためには、中国大使館を始め、中国有識者等とのご支援を賜ればと思料します。

今後も中国を初めとしました方々との「人と人の交流」をより密にし「互助、共助、互恵」の関係を構築するよう努めてまいります。

当会は、教育の振興を目的としました公益財団法人であります。満足に教育が受けられない子どもたちにとって、国境という地理的な隔たりは関係ありません。

今後とも、多くの都道府県の教育関係者の方々のより一層のご支援を賜りますことを深甚よりお願い申し上げます。

■ 視察研修訪中団（教育交流　派遣事業）

視察研修訪中団は、９月23日（水）から26日（土）までの日程で、北京市・泰安市（山東省）で行いました。各県より12名の参加があり総勢14名で実施しました。中国側の受け入れは、宋慶齢基金会で、あらかじめ基金会と打ち合わせる中で、泰安市東平県の小学校で視察及び授業参観・交流会を行うことができました。また、北京市及び泰安市の見学は、近現代における中国と日本との交流という観点から、宋慶齢・魯迅の故居を中心に史跡・資料等について研鑽を深めました。また、盧溝橋・抗日戦争記念館での研修においては、戦後70年という歴史的節目に当たる年という意味も含め、あらゆる視点から日中関係の過去をしっかりととらえるという意味で、大いに意義がありました。さらには、犠牲者への献花も行い、日中関係発展の過去から未来への決意を示すこともできたと思います。

宋慶齢基金会を訪問

抗日戦争記念館にて

（1）訪中団実施要項

1．団 名 称　公益財団法人日本中国国際教育交流協会派遣「視察研修訪中団」

2．実施目的
(1) 宋慶齢基金会を通しての新たな教育交流プロジェクトの対象地である山東省泰安市東平県の学校で、学校視察・授業参観・情報交換を行う。
(2) 泰山等の名所・史跡を訪ねることを通して中国の歴史・文化について学ぶ。
(3) 北京市内にある宋慶齢の故居、魯迅の故居を訪ね中国近代史と合わせて日中交流の歴史についても研修する。
(4) 盧溝橋・抗日戦争記念館を訪ね、戦後70年の流れの上に立って、日中の近現代について研修する。
(5) 北京市内の様子等を見学することを通して、中国の今について肌で学ぶ。

3．訪問期間　2015年９月23日㈬から26日㈯（３泊４日）

4．訪 問 地　北京市及び泰安市東平県（山東省）

5．参加者数　14名（代表理事・業務執行理事を含む）

6．日　　程
○23日㈬ 出発（羽田）北京市
・宋慶齢故居及び魯迅故居見学
・宋慶齢基金会表敬訪問
北京市泊
○24日㈭ 北京南駅（高速鉄道）→済南西駅　泰安市
・学校訪問（教育委員会及び学校関係者と交流）
泰安市泊
○25日㈮ 泰安市　北京市
・道教の聖地＝世界遺産泰山の見学
・訪中団の総括懇親会
北京市泊

○26日(土) 北京市　着（羽田）
・盧溝橋及び抗日戦争記念館研修

（2）訪中団日程

◎９月23日(水)　北京市
○羽田集合 7：00　結団式　団員14名
○羽田発 9：10　JL021　→　北京着 12：20
○視察研修・表敬訪問（専用バス）13：00
宋慶齢故居見学　→　魯迅故居見学　→　宋慶齢基金会表敬訪問
○夕食（宋慶齢基金会招待）
○宿泊（北京中成天壇假日酒店＝ホリデイイン天壇ホテル）

◎９月24日(木)　山東省泰安市東平県
○北京南駅（高速鉄道）9：14　→　済南西駅 10：53
基金会より担当２名が同行（計16名）
○昼食　市内レストラン
○視察研修・学校訪問・教育委員会及び学校関係者と交流（専用バス）
市内小学校（２～３校）で音楽授業の見学　→　教育委員会との懇談
○夕食　市内レストラン
○宿泊（泰安肥城宝盛大酒店）

◎９月25日(金)　泰安市・北京市
○泰安市視察研修（専用バス）
道教の聖地＝世界遺産泰山の見学
○昼食　市内レストラン
○済南西駅（高速鉄道）15：24　→　北京南駅 17：03
○夕食 18：30　宋慶齢基金会への答礼宴　市内レストラン
基金会から３名招待（計19名）
○宿泊（北京中成天壇假日酒店＝ホリデイイン天壇ホテル）

◎９月26日(土)　北京市
○視察研修（専用バス）
盧溝橋　→　抗日戦争記念館研修
○昼食　市内レストラン
○北京発 16：40　JL022　→　羽田着 21：30
○解団式　解散

（3）訪中団参加者名簿

NO	氏　名	読　み（ローマ字）	男女	職　名
1	黒田文男	KURODA Humio	男	日本中国国際教育交流協会代表理事
2	赤岡直人	AKAOKA Naoto	男	日本中国国際教育交流協会業務執行理事
3	梅本　修	UMEMOTO Osamu	男	日本教職員組合教育文化部長
4	仲林義浩	NAKABAYASHI Yoshihiro	男	教職員生活協同組合常務理事
5	檜山和寿	HIYAMA Kazutoshi	男	茨城県教職員組合書記次長
6	葛生　毅	KUZU Takeshi	男	千葉県教職員組合中央執行委員長
7	芹沢秀行	SERIZAWA Hideyuki	男	神奈川県教職員組合執行委員長
8	伊東良祐	ITO Yoshimasa	男	湘南教職員組合書記長
9	笹本信仁	SASAMOTO Sinji	男	山梨県教職員組合書記長
10	鈴木伸昭	SUZUKI Nobuaki	男	静岡県教職員組合執行委員長
11	小橋博美	KOBASHI Hiromi	女	富山県教職員組合書記次長
12	谷口康男	TANIGUTI Yasuo	男	福井県教職員組合執行委員
13	鈴木雅勝	SUZUKI Masakatu	男	愛知県教職員組合会計委員
14	山門　真	YAMAKADO Shin	男	三重県教職員組合書記長

（4）山東省東平県教育事情

東平県は山東省泰安市に属し、管轄している田舎町は11、共同体は３、村は716である。総面積は1343平方キロメートルで、総人口は79万人に達している。現在、当県には学校が合わせて140校あり、小学校134校、中学校20校、高等学校３校、私立高校１校、専門学校、教員研修センター、特別支援学校各１校からなっている。在校生は66313人で、うち、小学生37620人、中学生20770人、高校生7923人。従業員は6674人で、うち、教員5964人。幼稚園は233所で、その中の106所は登録済みで、残りの127所は登録待ちとなっている。登録済みの106所の幼稚園の中に、市立及び市立性の幼稚園は85所あり、全体の36.48％を占めている。幼稚園に通っている児童は合わせて19813人で、3－5歳の児童の入園率は88.01％に達している。幼稚園教諭は1116人で、その中の292人が常勤教員で、全体の26.16％を占めている。

当県の教育振興を図り、県の経済社会の発展を推進するため、県庁はハイレベルに位置づけ、科学的に計画し、2012年に「東平県教育振興計画」及び関連文書を発布した。そして、今後三年間教育振興の全体構想・目標・重点任務・保障措置を明確にした。三年間で3.68億元を投資し、指導・体制・教育投資・構成の調整・インフラ整備・内部管理・環境の最適化などの方面から、任務を細分化し、担当を明確にして、全面的で強力な教育改革・発展を推進していく予定である。

2013年末までに、当県はすでに教育プロジェクトに2816.4万元を投資し、校舎及びインフラストラクチャーを32軒建てた。マルチメディア教室が全体の82.3％にも達して、泰安市での先進レベルに入った。

今まで収めた成績を高く評価すると同時に、当県教育発展の基礎が比較的に弱いこと、特に教育振興計画を推進していくなか、まだいろいろな問題や難題、主に資金問題、に直面していることを正視しなければならない。2012年「山東省就学前教育規定」に基づき、東平県県庁は「一歩進んで就学前教育の発展を加速させる実施意見」を方針に、省級示範（トップテン）及び市県級示範幼稚園を「取っ掛かり」に、田舎町中央幼稚園のレベルアップ、実力が薄弱な幼稚園の転化・向上、幼稚園設備の標準化、幼稚園教諭・保護者へのトレーニングの四つの方面に力を入れる。現在直面している主な問題はいろんな条件制限を受けているので、音楽機材は古くなったこと、特に辺境に位置している農村の小学校、幼稚園は音楽機材が非常に乏しいこと。音楽機材はともかく、音楽教師すらいない小学校もあるので、当県全体の音楽教育が影響され、他の地方より遅れている。さらに、当県素質教育の健康で持続的な発展の障りにもなった。

東平県は山東省未発達30県の１つで、泰安市の最西端に位置し、主な地形は丘陵や湖である。当県は経済の基礎が薄弱で、田舎町の財政力が乏しい。教育資金の調達は難しくて、資金不足の状況が厳しい。それは教育振興計画プロジェクトの展開進捗を影響し、教育インフラストラクチャーが全体的に遅れていることが非常に深刻になっている。とりわけ、学校配置の調整にともない、関連インフラ新規プロジェクトとして起動したスクールバスのパイロットプロジェクトは資金不足のため、なかなか起動できなくて、市民が品質の高い教育資源への需要を満たすことができないのが現状である。

2015年１月７日　　宋慶齢基金会より

（5）訪中団報告

●北京市内研修（宋慶齢故居）

宋慶齢は、中華民国、中華人民共和国の政治家。1893年１月27日、漢民族の客家の宋耀如（宋嘉樹、チャーリー宋）と倪桂珍の次女として上海市で生まれた。1907年、上海中西女塾高中を卒業後、14歳でアメリカに留学する。1913年、ジョージア州のウェスレイアン大学で文学学士号を取得し、帰国する。1914年、父親が支援していた孫文の英文秘書を務める。1915年10月25日、孫文（宋慶齢より26歳年長）と東京で結婚する。婚姻後は、孫文の活動を支え、孫文逝去後は中国国民党中央執行委員に就任している。1959年４月、抗日戦や国共内戦などの終結を経て、中華人民共和国内でさまざまな役職に歴任し、国家副主席に就任する。1981年５月16日「中華人民共和国名誉主席」の称号を受け、同月29日、北京にて88歳で逝去する。

1997年制作の香港・日本合作映画『宋家の三姉妹』は、宋慶齢をはじめ、近代中国史に大きな影響を与えた宗家の三姉妹（宋靄齢・宋美齢）を描いた伝記映画である。長女の宋靄齢は大財閥の孔祥熙と、次女の宋慶齢は中国革命の父孫文と、三女の宋美齢は後の中華民国総統蒋介石と結婚し、彼女たちは辛亥革命・満州事変・西安事件・日中戦争・国共内戦と続いていく激動の中国近現代史を動かす存在となっていく。映画の公開時のキャッチコピーは「中国に伝説となった三人の姉妹がいた。ひとりは金を愛し、ひとりは権力を愛し、ひとりは国を愛した」であった。次女の宋慶齢は、「国を愛した」と表されている。

宋慶齢故居は、天安門広場の北側、車で約15分ぐらいの所にある「後海（后海）」の北沿いにある。岸辺には柳の木が多数植えられ、「後海（后海）」とは道路を面して建てられている。その道路沿いには、現代の中国社会を物語っているのか明らかに日常的に駐車していると思われる車が多数見られた。

故居の敷地面積は約２万平方メートルで、建築面積は５千平方メートル余り。もともとは清朝最後の皇帝である溥儀の父親、醇親王載灃の邸宅で、西花園とも呼ばれている。庭園には回廊が張りめぐらされ、楼や堂、あずまや、高殿などが立ち並ぶ。回流する清水、連山、緑豊かな古木、咲き乱れる花々。非常に典雅で静寂に包まれた庭園だ。

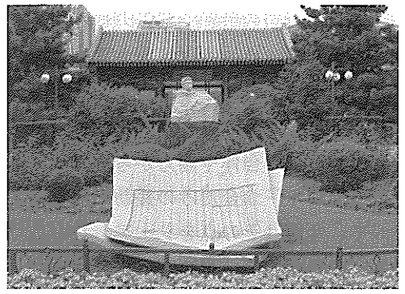
中華人民共和国成立後、党と政府は宋慶齢のために北京に住まいを造ることにしたが、彼女は何度も断っていた。そこで1962年、周恩来総理は党と政府の委託を受けて、この花園を改修して宋慶齢の住まいにすることを自ら計画し、従来の建築物の西側に、西洋の風格を採り入れた２階建ての主楼を建設した。宋慶齢は1963年４月に移り住み、1981年５月29日になくなるまで18年もの間、ここで仕事をし、生活をした。

1981年10月、中国共産党中央はこの場所を「中華人民共和国名誉主席・宋慶齢同志の故居」と命名するとともに、国務院は全国重要文化財に指定した。故居を取り巻く壁の高さや入口でのしっかりと守衛などから、国の管轄におかれていることがうかがえる。そして、故居全体が、全国で収集した文物や資料、当時の調度品などが「宋慶齢同志の生涯展」として展示されている。そして、文物庫には、出生から中華人民共和国成立までの豊富な資料、建国後の平和運動や児童保護運動の足跡、等が展示されている。その中には、毛沢東や周恩来の自筆の感謝状、保証人が日本の友人となっている結婚誓約書など、彼女の幅広い活動が偲ばれる文書も展示されている。また、主楼は、日常の彼女の生活空間で、食堂、居間、書斎、寝室などをガラス越しに見学できる。アメリカにも留学していた時代があり、中国にいるとは思えないような洋風な感じが漂う調度品、当時の生活の一端をうかがい知ることができた。

（記録：葛生　毅）

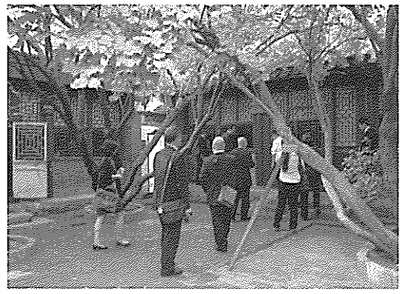
●魯迅故居と魯迅博物館

北京には、魯迅故居（中国近代文学者の確立者である魯迅がかつて住んでいた家）とその東側に魯迅博物館があります。魯迅故居は、魯迅が1924年５月から1926年８月までの２年間、住んだところです。ここで多くの小説、エッセイなどを創作しました。代表作は「野草」「彷徨」などがあります。

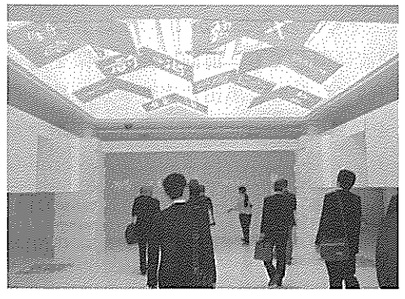


家はこぢんまりとした伝統様式の家屋、四合院となっています。北側には書斎があり、そこで創作活動を行っていました。周恩来が訪問しその書斎の様子を見て「小さいけど偉大。」という言葉を残しています。多分、この小さな書斎から多くの人々に影響を与える書物が作成された、という思いからの言葉だったのではと思われます。

魯迅博物館は、1956年10月にオープンしました。また、1996年10月には新しい展示室もオープンしました。この博物館は、魯迅の各地での生活や活動の様子、遺稿など、多くの作品や関わり合った人々などを年代別に展示しています。また、魯迅が12歳から17歳まで学んだ学校である三味書屋の様子も展示されています。当時魯迅は、家族のために毎朝薬をもらいに行ってから学校に通っていたそうです。そのため、遅刻が多くそのことを教師に厳しく叱られたそうです。魯迅はそれが悔しく、机の上に「早」という文字を刻みました。それ以後遅刻はなくなったという逸話があるそうです。その他、魯迅使用の筆やデスマスクなども陳列してあります。



魯迅は、浙江省出身の文学者、思想家であり、中国近代文学の確立者です。中国で最も早く西洋の技法を用いて小説を書いた作家とされています。貧しい生活を送っていたそうですが、そのような生活に身を置いていたからこそ、人々に大きな影響を与えることのできる作品が書けたのではないかとの説明がありました。その作品は、中国だけでなく、広く東アジアでも愛読されているそうです。また、日本でも中学校用のすべての国語教科書に彼の作品が収録されています。一方で2014年より、残念ながら中国の教科書には魯迅の作品が収録されなくなりました。このことに関して中国でも、「重要な作品なので残念に思う。」という意見と、「もう古いので新しいものをより取り入れた方が良い。」という意見にわかれているそうです。



魯迅はかつて1902年から1908年にかけ日本に留学しています。はじめ医学を専攻します。それは、医学が国の人々を救うという考えからです。また、西洋の文学や哲学にも強い関心をもち、ニーチェやダーウィン、ロシアの小説なども読み、大きな影響を受けました。ある時ロシアのスパイとして中国人が打ち首にされる画像を見ます。そのとき、同じ中国人が屈辱を感じることもなく、好奇心に満ちた表情でその出来事を眺めている姿に衝撃を受けます。その出来事から、魯迅は中国の人々の体を治す以前に心を治さなくてはいけないと考えるようになります。このような思いが小説家魯迅の原点となっているようです。その後、散文を書き始めます。魯迅は文学を通し、人々の心を変え、新しい中国の社会ルールを作ろうとしました。

自身の作品ばかりではなく教師としても多くの人々に影響を与えていたようです。大学の教師時代の魯迅の授業は、他大学などの学生たちも押し寄せ毎回立ち見が出るような状態だったそうです。

魯迅は、1936年10月19日上海にて、持病の喘息の発作で急逝します。55才でした。

中国では魯迅は中国革命の聖人とされています。

参考文献　「アラチャイナ中国旅行ホームページ」「wikipedia」

（記録：檜山和寿）

●宋慶齢基金会表敬訪問

宋慶齢基金会は中華人民共和国中央人民政府委員会副主席などを務めた宋慶齢氏（孫文夫人）を記念して設立された公益団体です。

当日は、イギリスの外務大臣が来ていることもあり、忙しい中にもかかわらず、基金会の理事である唐九紅氏が丁寧に対応してくださりました。唐九紅氏は２年前にも日本を訪問しており、三重県を訪れたそうです。ご存じな方もいるかもしれませんが、バドミントンの女子世界チャンピオンであり、当時は何度も日本を訪れていて、初めての団体優勝が1990年に行われた日本での大会だったそうです。当時の様子を嬉しそうに語り、基金会の現状についてもお話しいただきました。

「宋慶齢基金会は婦人と子どもを中心とした活動に取り組んでおり、その他にも教育、医療、文化とスポーツに対しても精力的に取り組んでいます。またそれらを通して、世界の有名な会社との合作や協力からプロジェクトもたくさん行っています。教育支援の面では、貧しい大学生の支援も行っており、お金だけの援助ではなく、全面的な発達をサポートしています。私はもともとスポーツ選手だったので、今回はその点をシェアしたいと思います。実はバスケットボール、サッカーでも基金会を作り交流を行っているところで、中国から子どもたちを連れて、サッカーの文化交流をして、月曜日にイギリスから帰ったばかりなんです。また、100名のスポーツ選手の世界チャンピオンを集め、それに対する基金も作りました。どんなに努力してチャンピオンになったかを子どもたちに知ってもらい、勇気付けることができたらと考えています。もしチャンスがあれば、日本の世界チャンピオンとも協力できることを望んでいます。今回の訪中にあたっては、心から歓迎の意を表したいです。また、古い友人の皆様、新しい友人の皆様に感謝しています。」と、話されました。

私たち日中国際交流協会からも黒田代表理事が挨拶をされました。「まずもって今回の再会を嬉しく思っています。今日のメンバーは基金会も協会のプロジェクトも知らずに来ている人が多いので今の話を聞いていて大変驚いていると思います。私は以前、唐九紅氏と三重でお会いした際に大変感銘を受けたことがあります。宋慶齢基金会はいろんな財団と交流し、トヨタ財団のような大きな財団とも交流するけど、あなたたちの協会とやることがブランドなんだと言っていただいたことです。それは、日本も中国も子どもたちが同じように、平等に育って欲しいという気持ちが伝わったからだと認識しています。特に易県の方々には、公私ともに大変お世話になりました。易県との交流が成功だったのは、易県の教育者のおかげだったと考えます。明日は東平に行きますが、どんな交流ができるか、みなさんと考えたいと思っています。」と、述べられました。

協会の参加者からも、「今回が初めてで、いろいろ勉強をして帰りたい。」「以前、易県の教員、教育委員会が神奈川に来た時に大変熱心で、それを易県に帰ってから講習会を開いたと聞き、とても印象に残っている。そういったことができれば。」などの話が出ました。「今回の交流に関しても、前回同様、音楽を通したプロジェクトが考えられれば。」と、黒田代表理事から具体的な話も出ました。また「中長期的な計画の中で、是非、中国の先生方を呼ぶような計画を立てたい。」と、積極的な意見交流ができました。

（記録：伊東良祐）

●東平県小学校訪問

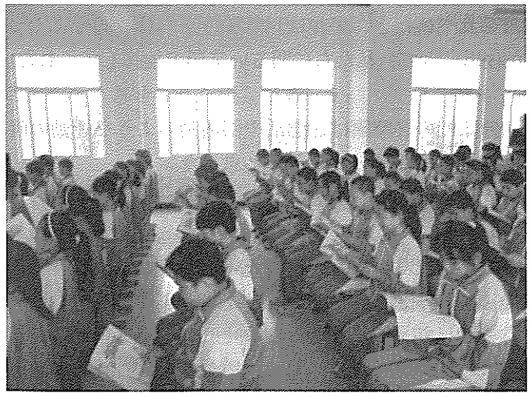
【東平県第四実験小学校訪問】

９月24日（木）、東平県第四実験小学校を訪問した。学校は2010年に設立され、学校の総面積は42,668.8㎡もあり、そのうち建物の占める面積は12,000㎡、緑化面積は16,678㎡（中国では学校などの敷地には緑地帯を何％以上設ける規定がある）である。建物は２棟の学習棟と総合棟・事務棟に分かれている。総建設費は6737万元（１元18円換算で約12億円）。学校備品はすべて高標準の物を使用し、全教室ネット回線が引かれている。その他、多目的ホール・読書ホール・ダンスルーム・ロボット実験室・航空模型実験室がそれぞれ１教室、コンピュータ室・放送室・音楽室がそれぞれ２教室、美術書法室（美術室と書道室）が３教室ある。また、カウンセリング室や衛生保健室も備え、300ｍのウレタン舗装された運動場も整備されている。学校は１年生から５年生までの39クラスに分かれている。2,856人の児童が在籍し、教職員は149人、非常勤講師が108人勤務している。

私たちがバスから降り、校門を抜けると先生方や、制服を着た４・５年生の児童代表がお出迎えをしてくれた。中国では今年度から小学校５年間、中学校４年間に改定され、５年生が最高学年である。児童代表は正面入口の孔子像や朗読の広場、さまざまな果物の木について紹介をしてくれた。広場には、噴水があり、その周りには木々が生い茂り多くのベンチが設置されていて、子どもたちの憩いの場になっている。また、塀には各クラスの絵が飾られていた。学校の広大な敷地に驚いたが、それ以上に、６レーン分のトラック、サッカーやテニス、バスケットコートがあり、その上、観覧席も設置されている競技場並みのグラウンドの広さに圧倒された。

学校紹介の後、校舎内に入り、５年生の音楽の授業を参観した。１クラス約70人と大人数だった。全員統一された運動着を着用していた。チャイムが鳴り、大きな声の挨拶で始まった。最初に、ピアノに合わせて全員で歌を歌った。全員が大きな声で歌っていて、教室中に響き渡った。歌い終わると全員で拍手をし、次の歌の学習に入った。初めて学習する歌のようで、ピアノやＩＣＴ機器を活用してメロディーを確認していた。その後、声に出して、次に、手拍子でリズムを確認していた。

１時限の授業の流れは、常に一斉授業で行われ、教師の指示に従い活動していた。子どもたちは最初の挨拶の時に立った後は、常に座った状態で話を聞き、歌も歌っていた。音楽の教室には椅子のみで机はなかった。子どもたちは背もたれのない椅子に姿勢を正して座り、教科書をしっかり両手で持って授業を受けていた。授業を受けている子どもたちの姿を見ていて、私たちが授業を参観に来ているからかもしれないが、型にはまった形式的な以前の日本の一斉授業の指導の仕方のようであると感じた。



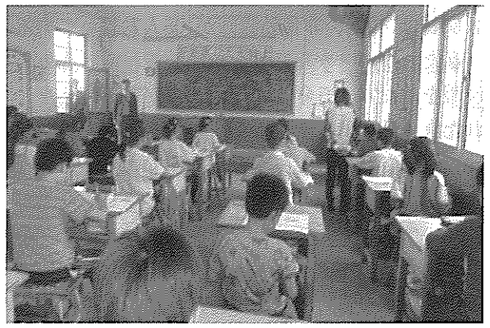
授業後、先生方に児童数を伺い、2,000人以上在籍していることを知り、学校の規模の大きさに驚愕した。中国の親たちが子どもを実験小学校に入学させたいという気持ちが大きいことを感じた。

玄関の方に戻る際に、廊下の方から他の学年の授業の様子も参観させていただいた。教室いっぱいに並んだ机で子どもたちは一生懸命学習にとりくんでいた。どのクラスも一斉指導の授業スタイルのようだった。玄関を出ると、校庭で体育の授業を行っていたクラスが戻ってきた。子どもたちとすれ違う際には、無邪気な顔で手を振りながら挨拶をしてくれた。途中、先生が私たちの姿に気がついたからか、先生の一声で隊列をつくり、代表児童の笛のリズムに合わせて、並びながら校舎に戻っていった。日頃、子どもたちはもっと生き生きと活動しているのではないかと思った。普段の子どもたちの素顔を見てみたいと感じた。

【東平県大羊鎮裴洼小学校訪問】

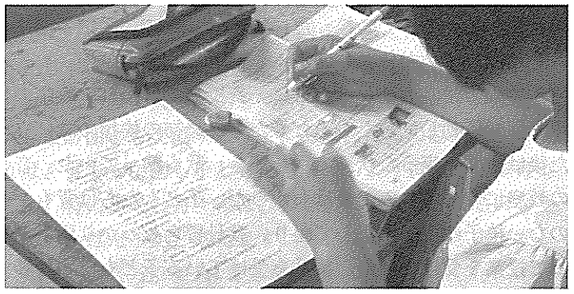
次に大羊鎮裴洼小学校を訪れた。大羊鎮裴洼は東平県の北に位置し、とうもろこし畑が広がるのどかな村に学校がある。東平県城北部山区に位置しており、以前は経済発展から取り残されてきた地域であった。しかし、近

年その経済発展の立ち後れを取り戻すため、基礎となる教育の発展が必要であると考えてる。大羊鎮裴洼小学校は国道105号線の西10kmの東平県城北部に位置している。



大羊鎮裴洼小学校では、「教育は質と量が肝心である」と掲げ、学校の環境・学校の文化（校風）づくり、子どもたちの総合的資質の向上等、様々な分野で活躍できる成績を収めさせることに力を入れている。2012年から2014年までの３年間、教育資質の先進校であるという表彰を受けた。2015年には市の教育局泰安市警察より「泰安市安全模範校（園）」の表彰を受ける予定である。常に、就学条件の改善に努めているが、財源にも限りがあり、「校舎の不足、さらには指導するための機能を備えていない教室」、「音楽・体育・美術などで使用するための備品に乏しく、しっかりとした教育ができない」等、諸課題が山積しているということである。これらの課題は開校当初より抱えているが、とりくみが社会で認められ、努力で困難を乗り越えていきたいということである。

実際に学校を訪れると、校門の所で裴召文校長先生をはじめ数名の先生が出迎えて下さった。小学校には、幼稚園を入れて８つのクラスがあり、小学生は261名、幼児75人の子どもが通学している。教職員は20名（うち50歳以上の教師は４人）勤務している。ここ１・２年のうちに在校生は350人に達すると見込まれている。学級はそれぞれ単級で４年生と１年生、２年生と５年生の教室が隣接していた。私たちが行ったのはちょうど、午後の２時間目の授業の途中で、５年生の教室に入ると、算数の授業をしていた。



32名の児童が、小数の割り算をしたり、教科書の計算問題の答え合わせをしたりしていた。１人の子どもがみんなと離れて後ろの方に座り、参加していないようだった。どこの国も同じだなと思い、本を開くよう促すとにこっとしてくれた。小学校は５年生まであり、どのクラスも子どもは30人前後で、落ち着いて授業を受けていた。図書室があったが、本は少ないように感じた。もうすぐ夕方になるというのに、教室の中は暗いままなのが気になった。この小学校の授業形態は、午前は８時から11時30分まで45分授業が４時限である。お昼になると、家へ昼食を食べに行き、午後は14時30分から17時30分まで授業を行う。10分間の休憩時間になると、子どもたちが教室から出てきて、私たちに明るい笑顔で挨拶してくれた。先ほど教室の後ろにいた子も顔を見せてくれた。

私たちが訪れた日は、授業は16時10分で終わった。17時30分までの２時限は、学活や部活動のような運動の時間に充てられているそうだ。小学校でも帰りが遅くなるので気をつけて帰ってほしいと思った。

【東平県教育委員会との懇談】

東平県教育委員会との懇談は、大羊小学校の小さな会議室で行われた。教育委員会からまず地域の概要説明があり、人口約80万人の行政区に小中学校併せて約140校、小中学校に在籍する児童生徒数は約６万人、小中以外も含めた教職員は約６千人とのことだった。基本的な教育姿勢として、子どもたちの幸せにつながる教育の実現と教育条件整備に向けた努力が教育委員会の使命であると述べられた。その後、黒田団長から自らの財団事業が日中の教育交流の架け橋になることを願う挨拶があった。宋慶齢基金会の仲立ちを得て、これまでの河北省易県との教育交流を重ねてきたノウハウを生かし、東平県とも音楽教育を通した教育交流ができればとの提案があった。

その後、２校の学校参観を踏まえての質疑・意見交換をした。カルチャーショックに近い教育事情を目の当たりにしたこともあり、様々な質問や意見が続出した。

子どもたちの学びに関わる事では、授業時間数や学習内容、小中の学制についての質疑応答がされた。授業時数は日本とほぼ同程度であり、学習内容も各学校で教材の採択等の自由度があるとのことであった。学制については現在小学校が５年制、中学校が４年制となっているが、昨年度までは６・３制であったとのことである。今年度から５・４制に移行したとのことであるが、山東省内の一部では、まだ６・３制を続けている学校もあるという。その辺りは日本の教育行政の緻密さと異なる所であり、中国という国の「広さ」故の実態であろうと推察した。

教育行政組織に関わることでは、学級編制基準や教職員定数、人事異動や賃金実態等が話題となった。中国でも学級編制は基本として小学校45人、中学校50人を上限としているらしい。しかし、最初に参観した「実験学校」では１クラス74人というまさに「すし詰め学級」が容認されていることから、その「寛容さ」がありありと分かる。授業形態が規律を重んじた一斉講義型であることから可能と思われるが、さほど問題視していないところは日本と大きく異なるところである。人事異動については、任用の形態や異動に対する考え方が異なる状況で、話し合いが若干噛み合わない感があった。日本のように都道府県レベルの範囲で任用して、意図的・計画的に各学校に教職員を配置し定期的に異動させる発想が独特なのであろう。アメリカやオーストラリアも基本的には学校との契約で雇用され、他校との定期的な人事異動はないと聞く。その意味で、日本での人事異動や定数管理等の教育システムは他国に例を見ないきめ細かさがあると言える。その細かさは時に制約となることもあるが、教育の機会均等を確保し、いわゆる「へき地」と言われる地域においても一定水準の教育を担保するシステムを確立する一助となっていることは誇るべき事と言える。

協議の時間に限りがあり、詳しい実情までは踏み込んだ話にはならなかったが、日本との相違を窓口にして、中国の教育事情の一端を覗くことができた。敢えて言えば、日本と中国双方の教育委員会制度の在り方についても聞くことが出来ればと事後になって気付いた。おそらく、そのことも両国の歴史的経緯や政治体制等の相違から、十分な相互理解にはならないのかもしれない。それだけに教育は単に教育関係者のみで論じ得るものでなく、様々な大きな要素が絡んで形作られるものであることに気付くかもしれない。いずれにしても、そうしたことを考えさせられた機会であった。

（記録：静岡県 鈴木伸昭・富山県 小橋博美・福井県 谷口康男・山梨県 笹本信仁）

●泰安市研修記録

３日目は泰安市の視察研修でした。

朝ホテルを出発し、泰安市内を視察しながら泰山へ。泰山までの道中は、世界遺産として観光客も意識しているのか、非常によく整備されていました。昨日の東平県の様子と比べると道路も広くきれいで、道路脇には昔ながらの民家は少なく、逆に新しくきれいな建物が多い印象でした。また、石屋が多く、巨石も目立ちました。

この日のメインとなるのは泰山の見学。世界遺産の山に登れるということで楽しみにしていた行程の一つではあったものの、事前に泰山について知っていた情報といえば、世界遺産となっていること以外には、封禅の儀式というものが行われる山として歴史小説で名前を見たことがあるぐらい。そのため、見るもの聞くもの、すべてが新鮮でした。

そもそも、泰山は、標高1545m、中国においては西の華山、南の衡山、中の嵩山、北の恒山、そして東の泰山が聖なる山として五岳と称されており、その一つであるとのこと。そして、その中でも最も東にあるため五岳の中で最も早く日が昇ること、周りが平野であることからより泰山が目立つこと、そして過去、魯や斉の時代などをとおし、多くの名人物が登ってきたことなどにより、五岳独尊、つまり、五岳の中でも最も尊いとされているとのことでした。

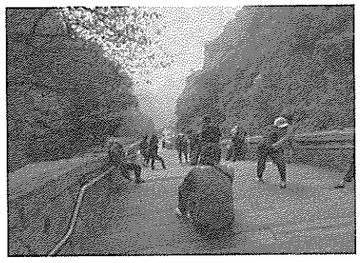
その、五岳の中で最も尊い泰山で行われてきたのが封禅の儀。国家の統一と王としての即位を天地に報告し、神に感謝する儀式で、秦の始皇帝までに72人の皇帝が行ったとされています。しかし、この儀式をやることは神に認められることであり、天変地異などよくないことがあったり臣下に諌められたりと、やりたくてもできなかった王もいたようです。

現在、その泰山には東、中、西、裏の４つの登山ルートがあり、東は7000段もの階段がある登山道を登るルート、中はバスと徒歩、そしてロープウェイを使うルート、西はバスとロープウェイで南天門の近くまで行き残りを歩くルート、そしてリフトを使う裏ルートがあるそうです。泰山に憧れ、そして何時間もかけて登ってきたこれまでの何億もの人々に思いを馳せつつ、私たちは泰山の登山ルートのうち一番楽な西ルートで登ることに。

まずホテルからのバスは、泰山の麓のバスターミナルへ。バスターミナルでガイドさんが切符を買いに行ってくださったのですが、代表数名のパスポートを持って行かれていました。高速鉄道に乗った時もパスポートを提示しましたし、きっちりしているというか厳しいというか…。とにかく切符を無事に手に入れ、マイクロバスサイズのバスに乗車。この日は晴天に恵まれていましたが、中国の連休前ということで随分すいていたようです。スムーズにバスにも乗車でき、いよいよ泰山が近づいてきました。

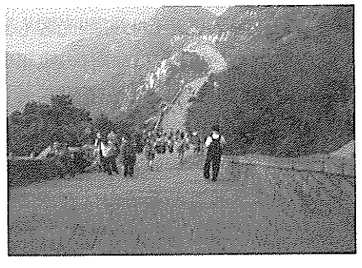
バスから見える山々は、いかにも中国、という、岩石が露出し、草木が生えてない険しい山々ばかり。まさかこの山に登るのか、とこれからの行程に不安を覚えつつ、バスはほどなくロープウェイ乗り場へ。

20人ぐらいで乗り込む大きなロープウェイをイメージしていましたが、実際には６人乗りの、よくスキー場にあるゴンドラタイプ。台数も多く、さほど待つこともなくここでもすぐに乗ることができました。

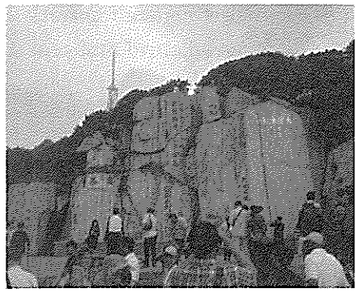


ロープウェイを降りて中国らしい建物に囲まれた道を少し歩くと、すぐに、南天門に到着しました。東から階段を7000段登ってくるとこの門に到着するとのことで、その登山ルートとなっている階段を南天門から見下ろすと…思わず足がすくむほどの急勾配。その角度70度とのこと。足を滑らせたらどこまでも転がっていきそうで、とてもちょっと下まで、という勇気はわきませんでした。このルートで来ると通常は少なくとも４時間以上はかかるそうですが、これをなんと58分で登りきった人もいたそうです。最短記録とのことです。信じられない！ロープウェイを降りてからこの後、山頂に至るまではほとんど石段が整備されていたので、登山というよりもどちらかというと観光地に来た、という感じが強かったのですが、ここのようにその石段は結構古かったり一段一段の幅が狭い上にまばらだったりする部分もあり、これまで数千年に渡り多くの人が登り続けてきたという歴史を感じることができました。

南天門から登山ルートに戻ると、「天街」に入ります。登山ルートの中にある繁華街で、土産物屋などが並んでいます。登山ルートにある門なども、中天門や南天門などと「天」という漢字が使われていることが多く、このような名前からも、泰山が他の山とは違う、聖なる山として古くから信仰されてきたことがうかがえました。ここからしばらくは比較的平坦で広い、歩きやすい道が続きます。やはり観光地だなぁ、と気を抜いて景色を楽しみながら歩いていると、しばらくしてまた急な階段が。階段の途中から歩いてきた方を振り返ってみると、まさに切り立った崖に作られた登山道。今でこそ道が広く整備されているので安心して歩くことができますが、昔はきっと細く整備もされていなかったはずで、ここをこれまでどれだけの人が危険を承知で登ってきたのだろうと思うと、中国の人の泰山への憧れと信仰の深さを改めて感じました。

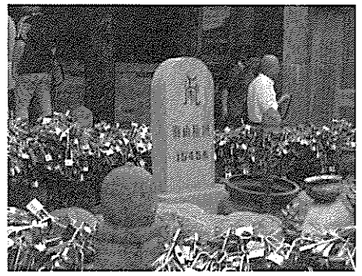


さらに階段を登り続け山頂が近づいてきたころ、急に広場のようなところに出ました。一面に、さまざまな文字が刻まれた非常に大きな岩が立ち並んでいます。大観峰というところで、1000文字以上もある唐の玄宗皇帝の



「紀泰山銘」をはじめ、これまで泰山に登ってきた皇帝などの文が石に刻み込まれています。ここに刻み込むことで皇帝としての威光を後世に伝えていたのだろうと思いますが、このような大きな岩に直接刻み込んで記録を残すというところからも日本との違いを感じました。一方で山頂直前には、無字碑として、漢の武帝が建てたと伝えられる５ｍほどの碑もありました。

山頂には玉皇廟があり、その中に、「泰山極頂　1545米」と彫られた石碑が建てられています。その周りは石の柵で囲まれていたのですが、南京錠でびっしり。なぜか日本の恋愛の聖地と言われるようなところでよく見る光景が…。中国の泰山という聖地で見ると、この南京錠に願をかけるという行為も何千年もの伝統に裏づけされたもののように感じてしまいますが、よく見てみると比較的きれいな南京錠も多く、いつからの伝統なのか、日本と中国の似た文化なのか、ちょっとほほえましく、また、興味深くもなりました。



泰山の山頂直下には孔子廟がありました。孔子の生まれ故郷とされる曲阜には今回は行く機会はありませんでしたが、ここでしっかりと孔子廟に参ることができました。古来から神聖な地とされ崇められてきた泰山の山頂直下にこれだけ立派な孔子廟があるということからも、孔子がどれだけ中国で偉大な人物として敬意を払われてきたのかという事実を表していると思いました。

ロープウェイを下り、帰りのバス乗り場へ。行きは乗ってすぐに出発したバスが、今度はなかなか動かない。どうも満員になると出発するらしいのですが、座席はほぼ埋まっていて空席があるといってもほんの３～４席ほど。しばらく待つとさらに２人組が乗り込み、空席はもうわずか。それでも出発せず待つこと10分以上。日本だったらクレーム続出だと思いますがおおらかなのか逆に厳密なのか…帰りの時間もあるのでガイドさんが運転手を呼びに行って交渉？の末、ようやく無事に出発、下山することができました。

登る前はどんな様子なのかまったく検討もつかなかった泰山でしたが、実際に登ったことで、山の神聖さと宗教的なものへの信仰が混在した奥深さ、二千年・三千年に渡ってさまざまな人が登り続けてきたという歴史の重さなどを強く感じました。そしてこういった一つ一つが、中国の人々の思想や考え方の背景の一つになっているのだとも感じ、その背景をほんのわずかではあるものの触れることができ、よい研修となりました。

（記録：鈴木雅勝）

●盧溝橋・中国人民抗日戦争記念館

盧溝橋と中国人民抗日戦争記念館は隣接しており、場所は四国４県の合計面積にも匹敵すると言われる広大な都市北京市内、天安門から南西約15キロメートルの地点にある。地下鉄の駅からは遠いので、公共交通機関で移動する場合はバスを利用することになる。

写真１「盧溝橋をわたる日本軍」

まず盧溝橋であるが、日中間の不幸な近現代を象徴するこの橋は、マルコポーロが『世界の記述』ですでに「世界中どこを探しても匹敵するものがないほどの見事さ」と描写しているように、金の時代の1192年に完成している。石造りの屈強な橋であり、現在でも自転車や、どう見ても日本のバイクにしか見えないが免許なしで乗れる北京名物の電動自転車が頻繁に行き来しており、生活道路として使われている。橋の

すべての欄干には獅子が約500基彫られており、顔の表情はすべて違う。

なお、来年から使用される中学生の歴史教科書（日本文教出版社）では「1937年７月、北京郊外の盧溝橋で、日本軍と中国軍の衝突事件が起こりました。」とあり、写真１「盧溝橋を渡る日本軍」が掲載されている。この写真１の向こう側に見えるのが苑平城であり、明末に建てられたこの城跡の中に中国人民抗日戦争記念館がある。

中国人民抗日戦争記念館は第７次５カ年計画（1986～1990年）における国家プロジェクトとして建設され、1987年７月７日の盧溝橋事件50周年に合わせて公開された。展示は８つのパートに分かれており、第１部「中国のいくつかの地域で起こった中国人民抗日戦線」、第２部「国家をあげての抗日総力戦線」、第３部「抗日戦線における中国共産党の指導」、第４部「日本軍の残虐行為」、第５部「東洋主要戦場における偉大な歴史的貢献」、第６部「中国人民戦線への国際的支援」、第７部「偉大なる勝利と日本ファシズム侵略の敗北」、第８部「世界の国々とともに歴史にとどめ恒久平和を実現する」で構成されている。特に第４部には残虐な行為を受けた中国人女性の写真や日本軍慰安婦についての記述がある。これら展示の中で特に強調されていたのは、抗日戦線で果たした中国共産党の的確な指導力、日本軍の蛮行、第二次世界大戦という反ファシズム戦争勝利における中国共産党の功績である。

抗日戦争勝利70周年が盛大に取り上げられる時期に私たちは中国人民抗日戦争記念館を見学したが、かなりの賑わいであった。スマートフォンで記念撮影をしながら見学する中国の若者、軍服姿で見学する中国人民軍の若き兵士、祖父と思しき男性が男児に展示写真について中国語で熱く解説している姿もあった。

見学に訪れる日本人は少ないように見受けられたが、これらの展示を見て私たち日本人は様々な思いを抱くことであろう。ちなみに来年から使用される中学生の歴史教科書（日本文教出版）では、「日本軍は、各地で激しい抵抗にあいながらも戦線を広げ、12月に占領した首都南京では、捕虜のほか、女性や子どもを含む多数の住民を殺害しました（南京事件）。」と記述されており、その横の注釈に「当時この事件は日本国民には知らされませんでした。戦後、極東軍事裁判に調査資料が提出され、その後の研究で、部隊や将兵の日記にもさまざまな殺害の事例が記されていることがわかりました。ただし全体像をどうとらえればよいのかなど、さらに研究が必要な部分があります。」とある。

この歴史教科書記述の微妙な言い回しと中国人民抗日戦争記念館の展示内容との乖離は「さらに必要とされる」研究に委ねるにしても、中国人民抗日戦争記念館を見学する中国の子どもたちと、近現代史に関して微妙な表現がなされている部分のある歴史教科書で学習する日本の子どもたちがこのグローバル化した社会に共存していることをしっかりと意識する必要がある。

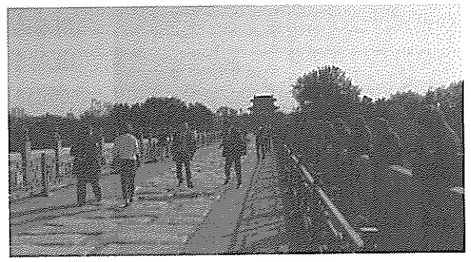


写真２「現在の盧溝橋」

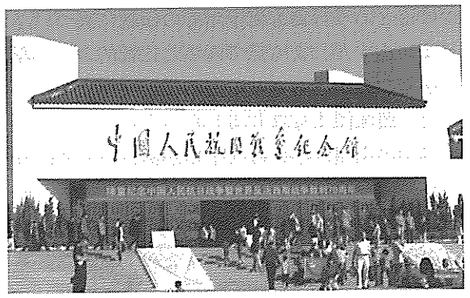


写真３「抗日戦争記念館正面」

写真４「代表して献花を行う黒田代表理事」

写真５「展示第４部　日本軍の残虐行為（日軍暴行）」

During the aggression into China, Japanese invaders brutally slaughtered, persecuted, and destroyed Chinese people, savagely bombed China's non-fortifications and non-military targets, cruelly killed war captives, enslaved laborers, forced "comfort woman" into service, launched bacterial and chemical warfares, conducted colonialism in occupied regions, promoted enslave education, poisoned Chinese people with opium, controlled China's economic lifelines in areas such as mining, transportation,, agriculture, finance and trade and plundered China's economic and cultural resources, committing numerous criminal offenses, bringing forth great sufferings to the Chinese people and leaving the darkest page in the history of the modern civilization.

「中国侵略の間、日本の侵略者たちは残酷に中国の人々を虐殺、迫害、崩壊させた。非要塞・非軍事施設を激しく爆撃、捕虜を虐殺、労働者を奴隷化、「慰安婦」に奉仕を強制、細菌・化学兵器の発射、占領地での植民地政策、奴隷化教育、アヘンで中国人を毒し、鉱物採掘・輸送・農業・金融・貿易といった分野で中国の経済的ライフラインを統制し経済・文化的資源を簒奪するといった数えきれないほどの犯罪行為を行った。中国の人々にあまりに大きな苦しみをもたらし、近代社会の歴史に最も暗い１ページを残した。」（日本語訳は著者作成）

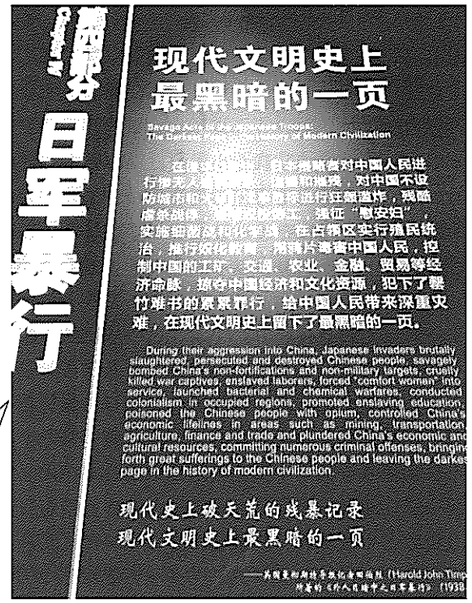


写真６　「展示第４部　冒頭の説明表記（拡大）」

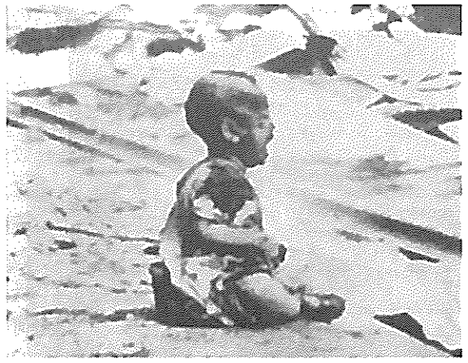


写真７「空爆後に取り残された子ども」

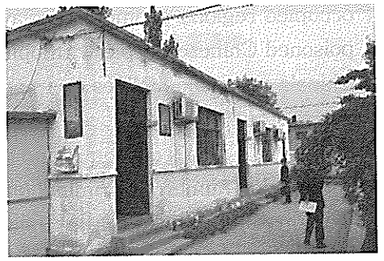
（記録：梅本　修・仲林義浩）

（6）訪中団感想

教育の機会均等とは

日教組　梅本　修

２校目の視察で訪れた小学校は、町の中心にある１校目の学校から車で30分ほどの場所にあった。敷地は狭く、教室が３つほどある平屋の建物がいくつか並んでいるだけの小さな学校だ。石ころだらけの小さな運動場は、元々畑だったところを最近整地してできたのだそうだ。そんな小学校で、「純朴」という言葉がぴったりの子どもたちが、一生懸命学習にとりくんでいる。私は少し切ない気持ちになっていた。



２校目に視察した小学校の校舎

それは１校目に訪れた小学校との圧倒的な格差が原因であった。１校目の学校は、これまで私が見てきたどの学校よりも立派で、施設の整った学校であった。きれいに着飾り、お化粧した女の子たちが視察団を出迎え、一生懸命覚えて何度も練習したであろう学校紹介の言葉を、身振り手振りを交えて上手に話していた。視察には地元テレビ局がついて回り、そうした子どもたちの様子をカメラに収め、その後は教委の方や教職員、基金会の方にインタビューを行っていた。授業は教室に備え付けのプロジェクターを活用した近代的な学習が行われ、運動場は陸上競技場と見紛うほどのものであった。

視察を終え、地元教育委員会との意見交換が行われた。参加者が熱心に質問し、意見を述べるなか、私は教育の機会均等という言葉について考えていた。私がこれまで見てきた学校には、その全てに運動場があり、体育館があり、音楽室や理科室があり、学校図書館があった。生徒数による多少の大きさの違いや、新しい・古いの差はあるとしても、どこに住んでいても施設・設備の整った学校で同水準の教育を受けられることは、ごくあたりまえのことだと思っていた。しかし、今回視察した２つの学校には、確固として埋めがたい格差があった。このことを、子どもたちはどのように感じているのだろうか。親や教員は、それについて質問を受けた時、どう答えているのだろう。教育の機会均等とはいったい何なのか。意見交換を終えても、それらの問いに対する答えにはたどり着くことができなかった。私はこの国について、あまりに無知であったのだ。

１校目に視察した学校で、学校の説明をする子ども

今後基金会との間で新しいプロジェクトが始まる。この取り組みが、地元や学校、そして子どもたちの幸せにつながることを、願わずにはいられなかった。

はじめての中国

教職員共済生活協同組合　仲林　義浩

この研修は教員としての原点を思い起させてくれる旅でした。

私の教員としての原点が教科「世界史」です。「なぜ先生になったの？」この質問に「子どもが好きだから」と答える教員は多いと思います。しかし私は「世界史が好き」だから、世界史の先生になりました。ところが思いもよらず７年間世界史の教員をした後、４年間労働組合の専従役員をすることになり、その際地方公務員共済組合法審議委員・地方公務員災害補償基金参与などを経験したことから、社会保障制度や労働問題に詳しくなり、「世界史大好き」教員であった私は現場復帰後政治経済の先生に宗旨替えしてしまいました。

高校世界史の1/3は中国史。そのクライマックスは中国共産党の結成から抗日戦線を経ての中華人民共和国の成立までだと思います。今回魯迅故居と宋慶齢故居を訪れる機会を頂きました。魯迅は中国共産党初代委員長陳独秀が創刊した『新青年』で頭角を現しました。抗日戦線における戦況の転機となった国共合作は、今回お世話になった基金会の創設者宋慶齢先生の尽力でもありました。中国史のクライマックスを実感し、世界史への熱い気持ちが蘇りました。

また友人と「機会の平等か？結果の平等か？」という議論をよくします。今回２つの学校を訪問する機会を頂きました。１つの小学校は近代的施設が整った町中の小学校。もう１つは運動場も未整備で、専門的な教員数も不十分な農村部の古めかしい小学校。どちらの小学校でも、先生方は目の前の子どもたちに精一杯のことをしていると思います。しかし結果は所与の条件に左右されます。

学力学習状況調査をめぐり、子どもたちの生活背景を無視した、結果のみにこだわる非建設的な議論が行われています。また政界等でも「二世」が跋扈し、「ペアレントクラシー」の現実があります。「結果の平等」をめざしつつ、「機会の平等」を確保する必要があります。

高速鉄道の車窓からは、広大な平原が見えました。５年間の交流により、易県では音楽教育研修を地元の教員だけでできるようになりました。この成果は、子どもたちに還元されていくと思います。そして今回の視察研修を元に組立てられるプロジェクトも、中国の大地に大輪を咲かせる花の種となればと思います。

ありがとうございました。

「北京市・泰安市視察研修訪中団」に参加して

茨城県　檜山　和寿

今回初めて「北京市・泰安市視察研修訪中団」に参加させていただきました。また、今回が初めての中国への訪問でもありました。お恥ずかしい限りですが、中国に関しての知識は、学生時代教科書で学んだことと（それも大分忘れかけています）、テレビを通して知る中国の情報ぐらいしかもっていませんでした。そんな状態で参加させていただいた今回の訪中でしたが、いろいろなことを感じさせてもらえる大変貴重な時間となりました。

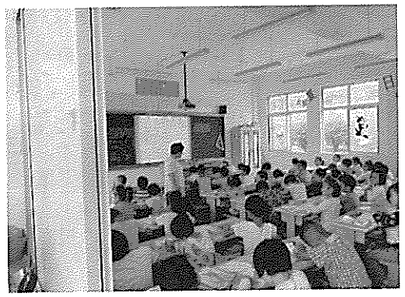
今回の訪中で特に強く感じたことが２点あります。１点目が、実際に中国で感じるイメージとマスコミを通して感じるイメージは違うと言うことです。当たり前のことかもしれませんが、改めてそれを感じました。わたしが訪れた限りでは、北京の空気はきれいでしたし、関わった方々も大変親切でした。マスコミも間違ったことを報道しているわけではないのかもしれませんが、一部を切り取って報道する都合上、そこの部分がクローズアップされイメージとして焼き付けられてしまうという部分があることを再認識しました。

２点目が、人との交流の大切さです。今回さまざまな中国の方々にお世話になりました。とても良くして下さり、中国に対するイメージが大変良くなりました。もちろん、お互いの国で様々な問題を改善していかなくてはいけない部分もあるかとは思いますが、そういった人々がいる国とは仲良くしてきたいと強く感じました。国同士のつきあいといっても、一番重要なのは人と人との交流で、そこでの印象が、その国の印象につながるのだなと自分は感じました。そういった面で、このような交流はお互いの国を理解し平和を築くために非常に大切なものなのだと感じます。一気に大勢の人々が交流することは難しいと思いますが、地道に交流を続けていくことが、少しずつではあるかもしれませんが、平和な世の中を作る第一歩になることを強く感じました。

今回の訪中は、外国の方との交流の大切さを認識できたことが特に大きな収穫でした。また、日本各地の方々とも知り合いになれたことも本当に大きな収穫です。中国に関してももっと勉強していこうと思っています。このようなチャンスを与えていただき本当にありがとうございました。

日本と中国の子どもたちのために、今、私たちにできることを　　千葉県　葛生　毅

北京市そして山東省泰安市を視察し、都市部での現代的なビル群や活気のあるデパート・店舗、そして数車線ある道路での渋滞、農村部での壊れかけた家屋や開店しているかわからない店舗、そして所々工事中の道路など、都市部と農村部との大きな格差を感じた。また、北京南駅から済南西駅までの約１時間40分の高速鉄道の移動でも、車窓からは、駅の周辺では高層ビルなどがあり賑やかそうであるものの、駅から離れると同じ景色が続いていた。特に、済南西駅にむかう時には霧なのか霞んでいたため、全く遠くの景色を見ることができなかったため、そのことを強く感じた。



そして、訪問した二つの学校でも大きな格差を感じた。ともに東平県内にある小学校で、一校は「东平县第四实验小学」で在校生2,856人の４階建て校舎が２棟あるさまざまな補助等を受けているモデル学校と、一校は「大羊鎮裴洼小学」で郊外にある１学級30人前後の単学級の学校を訪問した。教育環境という点から、モデル学校は、教室の黒板にプロジェクターでパソコン画面などが投影できたり、広い教室の中マイクを使用したりしている。また、全天候型の運動場、さまざまな樹木が植えられている校庭など、とてもきれいに環境が整備されている。一方、郊外の学校はさびた窓枠や小石の転がった校庭など、モデル校の訪問の後だけになおさら格差を感じた。国が大きく発展し経済成長をめざす社会の中で、国のめざす方向や保護者の子どもに対する期待など、それが子どもたちの教育にさまざまな歪みを生じてはいないのだろうか。しかし、どちらの学校の子どもたちも、授業中教員の話をしっかりと聞き、黙々と課題にとりくむ姿や、休み時間明るく元気に活動する姿が見られた。子どもの明るく元気で純粋な姿は日本も中国も変わらない。そして今後、日本と中国の子どもたちのために、どのような教育交流をすすめていくことが必要なのかということを考えさせられた。

最終日の盧溝橋や抗日戦争記念館の視察では、中国側が戦後70年という節目をどのように感じているのか、また、今の日本をどのようにみているのかということについて、特に、記念館の展示物から知ることができた。やはり今後も、さまざまな交流をとおして、互いの思いや考えを理解し対話していくことが必要であることを強く感じた。

引っ越しが出来ない関係とは　　神奈川県　芹沢　秀行

全国９県の教員の皆さんとともに、北京及び山東省泰安市東平県の小学校を訪問しました。私自身は、協会の理事として３月に事前視察を行い、それに続けての参加となりました。

現在、日本と中国の関係は、政治的に、日中戦争の戦後責任や尖閣に関わる領土問題など、緊迫した関係が続いています。一方、日本の貿易相手国としての中国の存在は、輸出２位輸入１位（2014年度）となっています。

両国の日中友好を求める関係者の合い言葉に、日中には3000年の友好の歴史があり、歴史の一時代に不幸なことがあったとしても、その友好は壊れるものではない、というものがあります。これは、日中の関係を時間軸から捉えた言葉です。それに対して、表題の「引っ越しの出来ない関係」というのは、両国の地理的関係を表す言葉です。隣人である以上、時としてトラブルが生じたり、考えが異なることもあるかも知れません。しかし、気に入らないからと、引っ越しをするということはお互いに、物理上出来ないことなのです。そうであるならば、如何にトラブルを防止し、友好的な関係を築く努力を互いにしていかなければならない、ということなのです。

視察した東平市では、最初に教育重点校を見学しました。ここは、高層マンションが林立する場所にあり、児童数3000人の学校です。指導方法については、まだまだ、一斉授業、講義型授業の傾向が強いものの、保護者の関心、学校長・教職員の意欲は強く感じられました。その次の視察は３月にも訪問をした農村の単級の小学校でした。私の子ども時代を彷彿させる素朴さを子どもたちは持っており、とても好感を持てましたが、校舎・教室内の明るさ、グランド等を前者の学校と比較すると、教育の機会均等の意味を改めて考えることになりました。日本の公立小学校間の格差とは、比較になりません。

短時間の訪問なので、性急な評価は禁物です。隣国の中国が、地方においてどのような教育事情になっているかを、まず知って、その上で両国の子どもたちの将来の幸福のために、それぞれの教職員が、どのような取り組みを進めていくのかを認識しつつ、交流していくことが必要だと感じました。

２年続けての中国訪問　　神奈川県　伊東　良祐

昨年の上海、南京に引き続き、今年も中国、場所は北京、泰安を９月23日から26日まで３泊４日で訪れました。総勢14名、他県の仲間との出会いや交流もこの旅の大事な機会だと思いました。

お互いの国同士の状況が芳しくない中での訪中ということもあり、一抹の不安はありましたが、そうした時期だからこそ訪れることは、実際の人同士の感情を知る意味でも大切だと感じました。泰安市の学校訪問、教職員や教育委員会との交流ならば尚更、教育を通して親交を深め、子どもたちの教育について議論を深め、それがお互いの平和関係に結びついていくことを望んでの旅となりました。

約３時間のフライトから北京に到着、事前の想像よりも青く澄んだ空にちょっと安堵しました。しかし人や車の多さは予想以上であり、首都集中する環境に数十年前の東京を思い浮かべました。

初日は宋慶齢の住居を訪れて、記念館を見る中で、彼女の生き方が孫文を助け、国民に寄り添い、走り抜けた人生だったことを、改めて実感しました。また、魯迅の住居や記念館にも訪れ、彼が人生の中で転々と移り住み、この北京でも生活した時期を知り、感慨深い気持ちにもなりました。観光を終え、北京の宋慶齢基金会の事務所を訪れました。今回の旅も昨年と同じく宋慶齢基金会のサポートを多分に受けました。劉さん、燕さん、本当にありがとうございました。

二日目は、三東省泰安市東平県の小学校を二校視察しました。東平の多くの小中学校は今年度より小学校が５年間、中学校が４年間の義務教育になったそうです。一校目は日本でいう研究校に当たる学校で、県が教育に力を入れる実験校で、子どもたちの校内説明から始まる盛大な出迎えを受けました。グランドは広大な広さでタータンのトラックにフィールドは人工芝で、その他にもバスケットコートや卓球台が多く設置されていました。教室での授業は音楽の合唱を中心に参観させてもらいましたが、１クラス70人近くで、典型的な一斉授業を行っていました。二校目は、そこからバスで15分移動した校外にある小さな学校でした。雑草が生えたグランドはたくさんの石が転がっており、サッカーゴールのネットは無く、まさに空き地に朝礼台がぽつんと置いてある状況でした。教室での授業風景は、25人前後で行われており、物珍しさそうに私たちの訪問を見ていたのが印象的でした。授業参観後に学校の教職員と東平県の教育委員会の方々を交えて懇談会を持ちました。話の中で、「現在の政府は教育を重視しており大きく環境が変わった。」「教育条件を良くし、バランスをとって良い方向に向かっている。教職員の教育については改革理念を持っている。」「また教職員は理想の高い、道徳的で愛を持つ教師になるよう努力している。」との話を伺いました。

私は二校を視察、交流させてもらう中で、同じ義務教育ながら施設面での大きな格差は手に取るようにわかりました。しかし、教育に対する熱意は同じであり、教師一人に対する子どもの数からは、果たしてどちらが理想の教育環境かと考えると、答えは難しいと思いました。来年度以降、音楽教育を中心に東平県の教職員や子どもたちと交流が始まろうとしています。今後ますます他国との交流が多くなる子どもたちの未来に対し、また、お隣さんである中国とのつながりを考える中で、私たち教職員同士が教育について語り、お互いの授業実践を通しながら協力していくことはとても大きな意味を持つと考えます。国境を越えて未来の子どもたちの架け橋になれればと思いました。

中国を訪れて感じたこと

山梨県　笹本　信仁

今回、この視察研修訪中に参加させていただき、感謝申し上げます。訪中は初めてだったので、とても楽しみにしていました。歴史のある大国中国は、教科者や書籍、報道等だけの知識しか無く、この訪中の経験は今後の私の考えに、大きな影響を与えていくことと思います。

北京空港に到着し、宋慶齢基金会に向かいました。広大な陸地が広がり、道路の幅も広く、自動車もあふれんばかりに渋滞していました。基金会では温かい歓迎を受け、市民レベルの交流の大切さを改めて感じました。

今回一番勉強になり、印象に残っているのは、山東省の２つの学校訪問です。初めに訪れた第四実験小学校は、教育設備・環境が整い、充実した教育が行われていることが一目で分かりました。１クラスに70人も在籍し、多くの保護者が希望するのは当然のことだと思いました。一方、次に訪れた大羊鎮裴洼小学校は、第四実験小学校と比べるのも申し訳ないほど、設備面では差がありました。こんなに差があって良いものかと感じました。しかし、かわいい子どもたちの顔は、世界中どこでも同じなんだと、当たり前のことを感じ、安心しました。

盧溝橋、抗日戦争記念館の見学も感慨深いものがありました。日本から見た中国、中国から見た日本、両側面から見ていかなければならないと思います。大切なことは互いに相手を尊重し、理解し合うことだと思います。歴史を踏まえ、未来思考の交流を行っていくことが大切だと思います。そういう意味で、この日中国際教育交流協会の活動の意義は非常に大きなことであると思います。今後も日中国際教育交流協会の活動が益々発展していくことを願います。

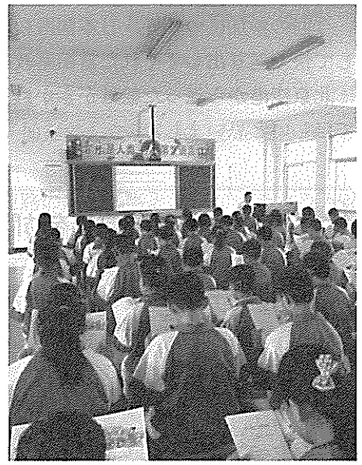
最後になりますが、宋慶齢基金会の皆様、事務局の赤岡先生をはじめ、企画運営していただいた方々に感謝を申し上げます。

歴史ある大国の教育事情を視察して

静岡県　鈴木　伸昭

北京空港に着いた時、まず空港施設の大きさに圧倒される。自分にとっての中国のイメージはここから始まる。言葉で表そうとすると、何事も「広い、大きい、大雑把」といったところであろうか。四千年の長い歴史と共に広大な国土、漢民族を主としつつも多民族で構成される13億超の人口を抱える国のエネルギーが産み出すものであろう。

今回、(財) 日中国際教育交流協会の視察事業として２回目の中国訪問をさせていただいた。前回は河北省易県における教育交流プロジェクトの成果を視察し、今回は新たな教育交流の在り方を模索するための視察であった。訪問した山東省東平県では、２校の対照的な公立小学校を参観させていただいた。「実験校」と呼ばれる大規模校と近隣にある単学級の小規模校であった。「実験校」は日本でいえば、研究指定校に当たるのであろうか。校門から校舎につながる通路の両側には何十本も木々が植えられ、グラウンドは緑の人工芝、児童は鮮やかな揃いの色の制服を着用、一クラス60～70人の過密学級で規律を重んじた授業が展開されていた。一方、そこからバスで20分とかからない所にある小規模学校は、一棟に２教室しかない小さな平屋の校舎が３棟並んでいるだけであった。私服の子どもたちが古い机や椅子に座って授業を受けていた。教室の天井には、蛍光灯は数本しかなかったが、それすらも点いていない。グラウンドは一周が100メートル程度と思われ整地も十分にされてない。雑草もあちこち見られる状態であった。この格差をどのように受け止めればよいのか。戸惑いを隠せないものであった。日本では相応に留意されている「教育の機会均等」という理念とは相容れないものであった。



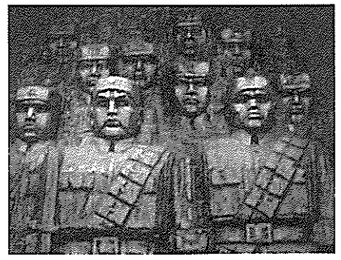
中国国内では、ここしばらくの急激な経済発展が国民の生活水準を大きく押し上げている一方で、都市部と地方、富裕層と貧困層との格差拡大が顕著になっている。当然ながら教育もその影響を避けられず、先進的な教育を受けられる層と経済発展に追い付けない層との差が生じてしまっているようである。広い国土と独特の歴史的風土や背景をもつ大国ゆえの課題であろう。対照的な日本の教育行政のきめ細かさは、時に制約と受け止められることはあっても優れたものであることを再認識した機会であった。幸いにも今回を含め何カ国かの教育事情を視察・体験する機会を得ることができたからこそ、浅学な私にも認識できたものと思う。自国の先人が築き上げてきてくれた教育制度の良さを堅持する努力を微力であっても重ねていきたいこと、民間レベルではこのような主体的な交流を重ねていくことが重要であることを強く心に思った次第である。

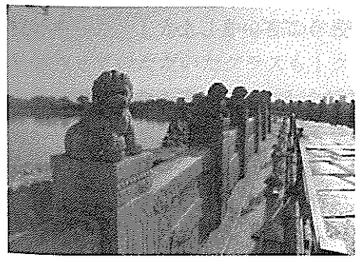
Seeing is believing（百聞は一見に如かず）

富山県　小橋　博美

中国は、上海から蘇州寒山寺までを旅行して以来、30年ぶりでした。羽田から飛行機に乗り約４時間で北京に着きました。マスクが必要と思い買い込んだのですが、マスクを付けている人はほとんどおらず、テレビと違うなと思いました。しかし、車の渋滞はすごく、ヘルメットもかぶらずに２人乗りしたバイクや自転車が、クラクションを鳴らして走る車の間をすり抜けながら通っていきました。私たちのバスも、両側の路上駐車している車にぶつかりそうになりながら、狭い道を走りました。ガイドの于小圭さんはラッシュの時間帯を考慮して空港へ迎えにきたり、移動先の時間調整をしたりして下さったので、予定通り視察することができました。宋慶齢故居・魯迅故居を見学し、宋慶齢基金会を表敬訪問しました。もとバドミントン世界チャンピオンの唐九紅さんの挨拶をうけました。宋慶齢基金会と日本中国国際教育交流協会の長年の交流があるおかげで、私も来ることができた事に感謝し、今後もお互いに友好関係を保ちながら、音楽やスポーツを通して、子どもたちを励ますプロジェクトの支援を続けたいと思いました。そして、自分にも何かできることはないかと模索しました。

翌日、山東省の泰安市にある東平県第四実験小学校と大洋鎮裴洼小学校の２校を視察しました。第四実験校では、音楽の授業を参観しました。先生はコンピュータを使いながら楽譜の指導をして、約70名の生徒が元気よく歌っているのが印象的でした。世界遺産泰山に登り10歳若返って北京に戻りました。北京は前日の雨で空が青々と澄み渡り、素晴らしい秋空でした。





最終日、盧溝橋へ行きました。盧溝橋の欄干には、１つ１つ顔の表情が違う獅子が置かれていました。その後、抗日戦争記念館へ行くと、多くの人であふれていました。最近、南京事件が世界記憶ユネスコ遺産に登録されましたが、私は、中国の人が戦争をどうみているか知りたいという気持ちで見て回りました。日本軍暴行ホールや抗日烈士ホールなどがあり、戦争の悲惨さを強く感じました。これだけの写真や資料を見たらやはり、日本人として負の歴

史を隠蔽してはいけないと思いました。

今回の参加について、日本国際教育交流協会の黒田代表理事、赤岡理事をはじめ、各県執行部の皆様11名、そして快く送り出してくれた富山県教組に感謝申し上げます。

北京空港から送った絵はがきが11月中旬に届きました。日本と中国が今後ますます良い友好関係になっていってほしいと思いました。

東平県の２つの小学校を訪問して

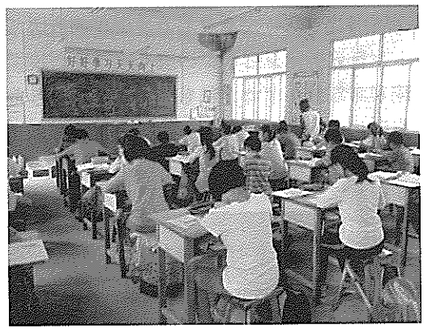
福井県　谷口　康男

今回、初めて訪中団に参加させていただきました。初めての体験で出発するまで不安でいっぱいでした。しかし、日本以外の学校を実際の目で見たことがなく、このようなチャンスはめったにないので、この体験を今後の自分の活動に役立てていこうという気持ちで研修に臨みました。

中国というと平屋の家や自転車が多い街並みのイメージがありましたが、北京の街並みを実際に見て、高層住宅や自動車、電動自転車の多さに驚きました。また、時速300kmで走る高速鉄道にも乗りました。中国の急速な成長を感じました。

今回の訪中で、山東省泰安市東平県の２つの小学校を訪問させていただきました。

まず初めに、東平県第四実験小学校を訪問しました。学校の広大な敷地に驚きましたが、それ以上にグラウンドには、６レーン分のトラック、サッカーやテニス、バスケットコートがあり、その上観覧席も設置されていて、陸上競技場並みの広さに圧倒されました。校舎内に入り、５年生の音楽の授業を参観しました。１クラス約70人と大人数でした。全員統一された服を着用していました。ピアノやＩＣＴ機器を活用してメロディーを確認し、その後声に出し、次に手拍子でリズムを確認していました。１時間の授業の流れは、常に一斉授業で行われ、教師の指示に従い活動していました。この学校には2000人以上在籍しており学校の規模の大きさに驚愕しました。



次に、大羊鎮裴洼小学校を訪問しました。各学年１クラスで約30人でした。特別教室も少なく使用する備品も乏しく、図書室の本の冊数も少なく、十分な教育ができない状況であると感じました。また、学校にはピアノがなく音楽専門の教員もいない状態で、今まで畑だった場所をグラウンドにしていました。その中で先生方はできることを一生懸命行っていました。子どもたちは先生の話をしっかり聞き課題に取り組んでいました。休み時間になるとグラウンドに出て元気に体を動かしていました。子どもたちは、授業中も休み時間ものびのびと活動しているなと感じました。

中国においても、子どもたちの生き生きとした姿や、先生方の子どもたちに対する思いは日本と同じであると感じました。社会に無知な私が貴重な体験をして無事に帰ってこられたのも、黒田団長をはじめ赤岡理事、各県の執行部の皆様、現地ガイド等、多くの方々のおかげです。大変お世話になりました。ありがとうございました。

中国の学校現場を見て感じたこと

愛知県　鈴木　雅勝

今回、視察研修訪中団に参加させていただき、初めて中国を訪問する機会を得た。

とはいえ、初めての中国。日本で中国の方と接したことはまったくない。加えて、食事、水、そして白酒…出発前はさまざまな不安もあった。

いざ到着してみると、空港での荷物受け取り場所までの電車移動、高速道路の車の多さと渋滞、クラクションの激しさ、さらに北京市内で音もなく突然背後に迫ってくる、結構なスピードで走る多くの電動自転車などには驚かされた。一方で魯迅博物館なども印象的だった。

さて、メインとなる現地小学校の見学では、実験校と言われる学校と、田舎の小さな学校を見ることができた。
実験校ではまず、制服を着た最上級生の５年生数人が代表として学校の説明をしてくれた。体育から戻る子どもたちは行進をして前を横切って行った。宋慶齢基金会の方がいたことも大きいのだろう、学校の先生方も気合を入れていることがうかがえた。施設も整っており、電光掲示板には歓迎の言葉が流れ、広い芝のグラウンド。職員用に一つ独立した建物があり、校舎はきれいな四階建て、教室ではプロジェクターも使用しながら授業が行われており、この実験校に力が注がれていることがよくわかった。唯一、一つの教室に70人近くの子どもが入って授業を受けていたということを除けば。一方、その後に訪れた小学校はまさに田舎のごくごく小さな学校。平屋建ての校舎、運動場も狭く石が転がっていた。職員室も狭く、図書館も四畳半ほどの広さで本の冊数もすぐ数えられるほど。さらに、音楽などは教科の専門の先生がいないとのことだった。教育条件整備というのは、どこの国でも共通の課題なのだと実感した。しかし、教室にいる子どもたちは30人をきる程度。休み時間になれば子どもたちが駆け寄ってきて言葉の違いを超えた交流が。無邪気な子どもたちを見ていると、教育の原点はこちらにあるような気もして、どちらがよいのかわからなくなった。

さまざま考えさせられることは多かったが、今回の研修を通し、宋慶齢基金会の方々や現地ガイドの方々が非常に親切であたたかく、そして丁寧に案内してくださった。そのおかげで当初の不安はまったくの杞憂に終わり、有意義で充実した四日間を過ごすことができた。この経験を職場や子どもたちに伝えていくことが、日中の相互理解、友好につながっていくと信じ、これから自分にできることを考えていきたい。

視察団参加の感想

三重県　山門　真

今回の日中国際教育交流協会の視察では、３泊４日の日程で、北京市、泰安市を視察させていただいた。印象に残った２つの点をここでは記させていただきたい。

一つ目は泰安市の小学校２校の視察である。一方は「実験校」と呼ばれる学校で、財政的には恵まれている学校、もう一方は郊外のあきらかに財政的には恵まれていない学校であった。しかし、中心部の学校は、定数過剰であり、見学させていただいたクラスも１クラス70人以上の児童が詰めこまれるなかで、整然とした授業がおこなわれていた。逆に郊外の学校では、教室も暗く狭いものの、児童数も少なく、子どもたちは元気で生き生きしていたように感じた。わたしたち大人は、子どもの教育に責任を負っていることは間違いなく、日本でも「子どもの貧困対策」が、各所で議論されている。もちろん、教職員定数や、教材を含む教

育条件整備が大切なことには違いなく、チャンスは平等にそこにあるべきだ。しかし、子どもたちが自ら考え、それぞれの自己実現をはかるために必要な「豊かさ」とはなにか、もう一度原点にかえって考える必要があると感じた２校の視察であった。

もう一点は、視察団で盧溝橋にほど近い場所に作られた中国人民抗日戦争記念館を訪問したことである。もちろんその展示内容や、そこを見学している多くの中国市民、おそらく未成年であろう若い兵士たちも印象に残ったが、自分が一番印象に残ったのは、記念館の駐車場や歩道で、警備誘導していた現地の係員たちである。黒田会長が記念館に献花をするために用意した花輪を、たまたま自分がガイドさんと２人で駐車場から運ぶことになり、道路を花輪をもって歩いていると、警備員から何度も声をかけられた。ガイドさんが、日本から学校の先生たちが来て、抗日記念館に花を献花するということを説明すると、みな笑顔で応えてくれ、何度かは一緒に写真をということになり、自分も一緒に写真に納まることとなった。抗日記念館ということで、いくらか身構えていた自分が恥ずかしく思えるような、彼ら、彼女たちの屈託のない笑顔がそこにあった。

短い期間の間に、多くの人々に出会い、泰安市では、現地の教職員のみなさんとも懇談をする機会があった。子どもたちへの想いは同じ。交流の大切さを感じた４日間であった。

■山東省泰安市東平県音楽教育支援プロジェクト（教育交流　支援事業）

易県の音楽教育支援プロジェクトの終了を受けて、山東省泰安市東平県への新たな教育支援プロジェクトが開始されました。昨年３月に行った「協会代表による打ち合わせ訪中」、９月に行った「視察研修訪中」を通しながら、泰安市東平県の教育局との話し合い、宋慶齢基金会との打ち合わせを行いながら、教育支援の内容を決定しました。今年度教育支援費100万円については、12月上旬の協定締結後、年末に宋慶齢基金会を窓口として東平県へ送金しました。

（１）2015年度教育支援に関する協定書

2015 年度教育支援に関する協定書

公益財団法人日本中国国際教育交流協会と中国宋慶齢基金会は、日中両国の友好のため、特に中国で経済発展途上地域の子どもの福祉のため、またより多くの子どもに教育を受ける機会を提供するため、今後共同の活動領域において互いに協力していくことで合意した。こうした目的を達成するため、以下の協定を結ぶ。

第一条（目的及び用途）
１．公益財団法人日本中国国際教育交流協会は、中国山東省泰安市東平県の児童・生徒に対する教育交流・支援を中国宋慶齢基金会を通して行う。これによって教育環境を改善し、教育水準を向上させる。

第二条（送金及び報告）
１．2015 年、公益財団法人日本中国国際教育交流協会は中国山東省泰安市東平県の小中学校の教育条件・教育レベルを改善するため、１００万円を支援する。

２.公益財団法人日本中国国際教育交流協会は 2015 年 12 月 30 日前に１００万日本円を中国宋慶齢基金会の指定口座に振り込む。中国宋慶齢基金会は振込を受け次第、支援金を山東省泰安市東平県文体教育局に送り、当地小中学校音楽教育の振興に使う。

３．中国宋慶齢基金会はプロジェクトが完成する際に、実施報告（具体的プロジェクトの実施内容、決算を含む）を公益財団法人日本中国国際教育交流協会に提出する。

双方は以上の協定に同意し、この協定を日本語と中国語共に各二部を作成し、双方の代表が署名捺印の上、それぞれ一部を保存するものとする。

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
代表：黒田文男
２０１５年12月１日

中国宋慶齢基金会
代表：
２０１５年12月４日

（2）東平県裴洼小学校などの学校の音楽器材援助申請の報告について

中国宋慶齢基金会、公益財団法人日中国際教育交流協会 殿

まず第一に皆様の我が県の教育事業への配慮と支持を感謝いたします！

我が県の裴洼小学校、夏谢小学校、苍邱小学校、孙岗小学校と王村小学校はそれぞれ大羊鎮、接山鎮、州城街道、東平街道に位置し、全て農村の小学校に分類されています。そのうち裴洼小学校は教師が20人、クラスが８つ、学生は311人おります。夏谢小学校は教師が18人で、そのうち音楽専任教師１名、音楽兼務教師３名、クラスが７つ、学生が285人おります。苍邱小学校は４つの行政村を学区としており、クラスは７つ、在校生は合わせて246人、教師は14人おります。孙岗小学校は７つの行政村を学区としており、クラスが５つ、学生は122人、教師は14人おります。王村小学校は山地に位置し、クラスが５つ、学生は200人余り、教師は14人おります。最近の２年間に人口の増加につれて、この５つの学校の在校生はそれぞれ300人ほどに達する予想です。

近年では、これらの学校は教育の質を重視しており、学校の環境と文化整備を強化し、学生の総合的な素質を高めることを重視し、各方面で素晴らしい結果を出しました。しかし各学校の財力が限られていますので、現在の音楽、体育、美術の教育施設・設備はまだ多く不足しており、とりわけ音楽器材がゼロに等しく、正常な教育の需要に満たしていない状況です。今後、 学生の総合的な素質をより良く育成するために、我が県の５校に貴協会の音楽器材のご援助をお願い申し上げます。

最後になりますが、あらためて貴協会のご担当者様の我々への関心と支持に感謝を申し上げます。

2015年10月27日

（3）裴洼小学校などの学校の音楽器材不足統計表

学　校	器材名称	型　番	単 位	数 量	単 価	合計(元)
裴洼小学校	電子オルガン	CASIO CTK-1150	台	10	650	6500
	ハーモニカ	天鵝 24 孔	個	10	100	1000
	胡弓		セット	10	300	3000
夏谢小学校	電子オルガン	CASIO CTK-1150	台	10	650	6500
	ハーモニカ	天鵝 24 孔	個	20	100	2000
	ドラムセット	YAMAHA 五鼓三镲	台	1	2000	2000
苍邱小学校	電子オルガン	CASIO CTK-1150	台	10	650	6500
	ハーモニカ	天鵝 24 孔	個	20	100	2000
	胡弓		セット	5	300	1500
孙岗小学校	電子オルガン	CASIO CTK-1150	台	12	650	7800
	ハーモニカ	天鵝 24 孔	個	10	100	1000
	胡弓		セット	5	300	1500
王村小学校	電子オルガン	CASIO CTK-1150	台	10	650	6500
	ハーモニカ	天鵝 24 孔	個	10	100	1000
	ドラムセット	YAMAHA 五鼓三镲	台	1	2000	2000
合　計						50800

■ 黒田代表理事らが中国を訪問（教育交流　派遣事業・受入事業・支援事業）

今後のプロジェクト等について意見交換と確認

2015年３月22～24日、黒田文男代表理事・赤岡直人業務執行理事・芹沢秀行理事の３名は、北京市にある中国宋慶齢基金会を訪問し、今後の教育交流　派遣・受入・支援プロジェクトの方向等について意見交換を行いました。また、山東省泰安市東平県を訪れ、小学校２校の視察を行うとともに、教育局の幹部と話し合いを持ちました。

（会談内容等につきましては、資料【共生力22号】をご覧ください。） 49ページ参照

■第４回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流　研究等助成事業）

中国人等外国人日本留学生は、年々増加しているとはいえ、日本を理解し、日本と母国との友好を担える人材の必要性は、今後とも増大していくことと考えられます。なかでも中国から日本に留学している学生のほとんどは、日本語学校に通学していると思われますが、特に入学初年度は、語学力も十分でなく、学業のみならず生活面でも困難に直面している学生も多いと言われています。こうした留学生の語学力の向上をめざし、日本をより良く理解する人材を育成するために、教育交流・研究等助成事業としてホームステイ事業を実施しています。今年度で第４回となる本事業は、上記の諸課題等に対して大きな成果を上げつつあると思われます。

（１）教育交流ホームステイ実施要項

１．実施目的　中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成すること

２．実施期日　2015年８月７日㈮から９日㈰　２泊３日

３．実施場所　山梨県下の家庭

４．対 象 者　中国からの留学生（大学入学のための語学研修生）

５．募 集 数　７人（ホストファミリー７家庭）

６．募集方法
- 留学生７名の選考は、ホームページ等で広く募集し、応募者の中から事務局で行う。
- ホストファミリーについては、山梨県の教職員関係団体の協力を得ながら選定を行う。
- ホストファミリーには、男女の希望等要望を聞きながらすすめる。（学生の選考と連絡を取り合い調整する）
- できるだけ同年代近く（小・中・高・大）の子どもがいるホストファミリーを募る。

７．日　　程　８月８日㈮
新宿：集合→山梨へ（中央線）甲府駅：ホストファミリーと合流（待合スペースで自己紹介等簡単なセレモニーを）→各ホストファミリーごとに活動にうつる
８月９日㈯
各ホストファミリーごとの取り組み
８月10日㈰
午前中は各ホストファミリーごとの取り組み
午後全体で交流会→ホストファミリーとのお別れ会→甲府駅から→新宿：解散

（２）ホームステイ日程（例）

日　程		行　動　と　内　容　（予定）
８月７日㈮	10：37	ＪＲ甲府駅改札口にて受入（新宿発９：00あずさ９号）　簡単な歓迎セレモニー
	11：00	武田神社へ参拝
	12：00	昼食（寿司）
	14：00	農村田園風景、清里キープ牧場、ソフトクリーム
	17：00	ホスト宅（荷物を置く）、自宅周辺を散策
	19：00	市川大門の花火大会または石和の花火
	22：30	入浴、就寝
８月８日㈯	６：30	起床、散歩
	７：00	朝食
	10：00	富士五湖方面散策（ビジターセンター、氷穴）
	12：00	昼食（郷土食ほうとうまたはそば）
	13：30	和紙の里中富にて体験活動
	17：00	ホスト宅、夕飯を一緒に作る
	20：00	石和の鵜飼い
	21：00	入浴、就寝準備
	22：30	就寝
８月９日㈰	６：30	起床、散歩
	７：00	朝食
	９：00	ブドウ狩り、農作業体験見学
	10：00	勝沼ぶどう郷散策
	12：00	恵林寺または善光寺参詣、昼食、地場産業センター
	14：30	山梨県教育会館へ集合　　ホームステイまとめの会
	16：00	甲府駅で送り出し（甲府発16：10かいじ118号）

（３）ホームステイホストファミリー・留学生名簿

	ホスト氏名	所　属　所（学校等）	学生氏名	読　み	男女	年齢
1	中村（なかむら）　直人（なおと）	甲州市立井尻小学校教諭	赵　康	zhao kang	男	21才
2	服部（はっとり）　町子（まちこ）	元甲州市立大藤小学校教頭	范　玉佳	fan yujia	女	18才
3	杉山（すぎやま）　順哉（じゅんや）	笛吹市立御坂西小学校教諭	葛　世明	ge shiming	男	19才
4	新海（しんかい）　英記（ひでき）	甲斐市立玉幡中学校教頭	戴　雨桦	dai yuhua	女	17才
5	梶原（かじわら）　貴（たかし）	甲州市立塩山中学校教諭	赵　元玮	zhao yuanwei	女	18才
6	志村（しむら）　隆（たかし）	昭和町立常永小学校校長	周　凌杰	zhou lingjie	男	19才
7	古屋（ふるや）　修宏（のぶひろ）	富士河口湖町立河口小学校教諭	楊　雨泓	yang yu hong	女	18才

（4）ホストファミリーからの報告

よかった点など

- 留学生には、山梨のこと・富士山のことを学ぶよい機会になったのではないかと思います。
- ホストファミリーにとっても、案内するという視点から地元の特色をとらえなおすよい機会となりました。
- 留学生と話す中で、日本と中国が仲よくしていくことがとても大切という話題がでました。ホストファミリーにとっても国際的な視点をもつ、大変貴重な機会をいただいたと感謝の思いでいます。
- お土産を用意してきてくださり、大変恐縮しています。中国の文化を知る機会となりました。
- 変化の少ない平凡な生活を送っている我が家にとっては、ホームステイ受け入れが新鮮な刺激となって有難かったです。
- ３日間は短かったのですが、こちらの都合をつけるにはこの位が良いと思います。
- 本人の勉学のために引き受けさせていただいたが、自分自身や家族にとっても良い経験になった。
- ３日間山梨を案内するということで日程の準備をしてきたが、自分自身も山梨の知らない部分を知ることができて良かった。
- １日目は武田神社、市川の花火大会へ行った。みんなで甚平を着て出かけた。甚平を着るのは初めてで着方が分からなかったようだが、教えてあげると正しく着ることができた。
- ２日目は河口湖、忍野、鳴沢を観光した。河口湖のさるまわし劇場で猿の演劇を見て、とても感激している様子だった。忍野八海では、チラシや看板の情報を得ながらじっくりと見学できた。その後、鳴沢氷穴に行った。氷穴のでき方などにも触れることができた。本人は温泉が好きだということでみたまの湯へ連れて行った。間違えてトイレのスリッパをはきながら浴室へ入ってしまうこともあったが、正しい温泉の入り方を学ぶことができた。夜景を見ながらの温泉に感動していた。
- ３日目は清里に出かけた。吐竜の滝に向かったがちょうど混んでいる時間帯だったので、駐車するまでに時間がかかってしまったが、無事に吐竜の滝まで着くことができた。滝を見ながらの水遊びを楽しんでいた。その後清泉寮へ行きソフトクリームを食べた。最後にお土産を買う時間をとってあげた。３日間お世話になったということで、３人の子どもたちにプレゼントまで買ってくれて子どもたちはとても喜んでいた。
- 日程的には少し忙しいかと心配したが、せっかく山梨に来てくれたので多くの経験をして帰ってもらえたらと思い作成した。ほぼ予定通り日程をこなすことができた。
- 天候にも恵まれ、有意義な、思い出のつまった交流ができた。
- 事前に、プロフィール・学生さんの希望などの資料をいただけたので、それらを参考にしながら交流計画を立てることができた。
- 料理に興味があったので、料理についての会話がはずんだこと。帰ってからも、自宅で作った日本料理の写真をメールで送ってくれるなど交流が続いている。
- ホストの両親にも協力してもらい、交流できたことで、多くの人と関わりをもつことができた。
- ２日目の夜に、学生さんが見たという夢の話（「自分のまわりの友達が、みんな山梨の人だった」という）が心に残っている。
- 感想発表会のあと、「もっと話したかった。話したいことがたくさんあった。」と話していた。たくさんの思い出ができたようだった。
- 留学生を案内することで、私たち自身が日本のことや山梨のことを改めて学び直すきっかけになったり、家族で過ごすきっかけにもなったりした。
- 高校を卒業して海外に留学させるご両親のことを訪ねたとき、「その期待を感じている」旨の反応で、我が家の子どもたちにもいい刺激になった。
- 過去の戦争のことを少し話題にしたが、それほど明解な反応をしなかった。（やや気を遣っていたか、俗に言われている経済優先の新しい世代なのかは不明）

- 言語の習得も、日常会話には困らないレベルだった。
- 私たち自身山梨のいろいろな場所を訪れたり、県外からの友人を案内したりしてよく知っているつもりでしたが、しかし、今回山梨を紹介するなかで、改めて山梨の良さや日本の良さを気づかせてくれました。
- 海外生活がある私たちですが、中国の文化や食生活、習慣など様々な話を聞くことができ、大変勉強になりました。中国に行ってみたい気持ちにもさせてくれました。
- ３日間生活を一緒にする中で、親戚の子が遊びに来てくれたかのように打ち解けました。私たちもすごく感情移入してしまい、喜んでもらえそうな場所へいろいろ案内しました。学生が興味を持っていることに応えてあげようと、私たちも山梨のこと、日本のことを再発見した良い機会でした。
- 学生との交流では、日中の壁はないと感じました。特に、これからの若い世代には前向きに仲良くやっていこうという感覚が必要なんだろうな、という感想を持ちました。
- 礼儀正しく、物怖じすることもなく、大変好ましい生活態度であった。苦手な食べ物はきちんと伝え、ほかは何でも食べてみようということで、食事に関して何も問題がなかった。
- こちらで計画した日程をすべて快く同意して精力的に行動、美術展や甲州市で開催していた『原爆と人間』パネル展等解説文を熱心に読み、見学した。
- 日本語学習も兼ねてということで、全く英語を用いず、すべて日本語で会話できたこと。さらに日本語の助詞の使い方などもその場で指摘して楽しく語学学習ができたこと。
- 記念となる陶芸体験もし、山梨での思い出が形となってのこされたことがよかった。
- 中国の各地を紹介したＤＶＤを見ながらさらに、詳しい中国の様子を知ることができたことは、ホストを受けた家族にとってもとても勉強になり良かった。

学生への評価

- 留学生はとても礼儀正しく、どこへお連れしてもしっかりとした態度で、大変感心させられました。日本の文化を学習しようという意欲も高く、私たちホストファミリーにとって、見習う点が多く、感謝しています。大変よい刺激をいただきました。
- お話しをする中で、自分の将来のイメージをしっかりともっていることが伝わってきました。自立心が高く、グローバル社会において急成長を続ける中国の背景を感じました。
- 礼儀正しくもあり、真面目でもありとても好感がもてました。
- 遠慮しているように見受けられることが多く、もう少し気軽に希望や要求を言ってほしかったです。
- とても真面目で控えめな青年だった。一日の終わりにはメモ帳に今日の出来事などをメモしていて、多くのことを吸収しようとする気持ちがとても伝わってきた。
- 折を見て山梨や日本のことを伝えてきたが、７月に日本に来たばかりということもあり日本語がうまく伝わらないときがあった。そんな時はわかりやすい言葉に置き換えたり、中国語の翻訳アプリで通訳したりしていた。
- 子どもの面倒を見てくれたり、荷物を運んでくれたり、気の利いたところがあり好感がもてた。
- 中国の文化などもたくさん教えてくれたので、日本との違いを知ることができた。
- 誠実でやさしい学生だった。
- 家族とも笑顔で話し、意欲的に関わってくれた。
- わからないことは積極的に聞いてきた。
- 「あの学生は苦労しているぞ」と実家の父。桃の収穫の手伝いをする中で、その仕事ぶりから感じたという。確かに高校卒業後、社会人として働いた経験がある。富士山の五合目でソフトクリームを食べた時にも、家族のゴミまでビニール袋に集めてくれた。人の様子を察し、細かな配慮がすすんでできる学生だった。
- デザインや建築に興味があるということで、見学地の選定の観点を伝えたら、大変喜んでくれ、素直な方だった。

- 来日後のこれまでの半年間で日本各地を訪ね、山梨にも来ているということで、大変行動的な印象を受けた。また、就寝時に一人で勉強するなど前向きな態度だった。
- 将来のビジョンが固まっていて、建築デザインの道に進みたいことや、将来の結婚や人生のことも大まかに話してくれ、しっかりしていた。
- 大変、気が回り、こちらが疑問に思っていることをすぐにスマホで調べて教えてくれたり、食事の片付けなど進んでやってくれた。
- 時間を厳守したり、我々家族にも大変気を遣ってくれたり、こちらが恐縮するくらいだったので、もっとリラックスさせてあげればよかったと、逆に反省した。
- 初めは緊張していましたが、とてもかわいらしく、いつも笑顔でいろいろな場面でもすぐに順応する柔軟性がありました。
- 大変礼儀正しく、謙虚で聡明な学生さんでした。靴をきちんとそろえたり、布団も耳をしっかりそろえてたたんだり、食事の片付けを手伝ったり、わからないことは何でも聞いてくれたりしました。
- 日本語もすごく上手で、敬語も使えて正しい言葉遣いでした。１月に来日したとは思えないくらいよく理解できていました。私たちとの会話も全く問題ありませんでした。
- 自分の夢をしっかり持っていて、その実現のためにしっかり勉強に励んでいる立派な子でした。将来は中国のみならず、世界中で活躍してほしいと思うくらい努力をしている良い子でした。
- いろいろなところへ行ったり、いろいろな体験活動をしたりしましたが、どれも喜んでくれて、私たちも喜べました。
- 姪っ子と過ごした時間が多かったのですが、すぐに打ち解けて話しかけたり、面倒を見てくれたりして助かりました。
- ２日目に富士山が見えなくて残念だったのですが、紙漉体験の灯籠に富士山の絵を描いたのが印象的でした。実際には見えなかったのに、心で見えた富士山を描くと言って描いたのがすごいと思いました。それで私たちも３日目に絶対富士山を見せてあげたくなりました。
- 東京に帰ってから、早速お礼のメールがきました。本人もですが母親からもお礼がありびっくりしました。是非機会があれば、また我が家に来てほしいと強く感じました。
- 留学生、ホームステイ学生として満点と評価できる。

今後への希望、改善して欲しい点

- とりくみのねらいや考え方が大変すばらしいので、今後も日中友好の機会が増えていけばよいと思います。
- ３日目に行われた全体交流会は、和やかな雰囲気の中、それぞれの留学生の思いやホストファミリーの思いを交流する機会となりました。とてもよい時間となったよう感じています。運営ありがとうございました。
- 当事者どうしの事前のやり取りができると、受け入れ側も予定を作りやすくなると思いました。
- 今回のきっかけを大切にし、交流をさらに深めていきたいと感じた。また本人も大学受験を控えているようなので、できることがあれば協力していきたいと思う。
- 今回とても貴重な経験をさせていただき赤岡先生をはじめ事務局の方には大変お世話になりました。また、機会があれば協力させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

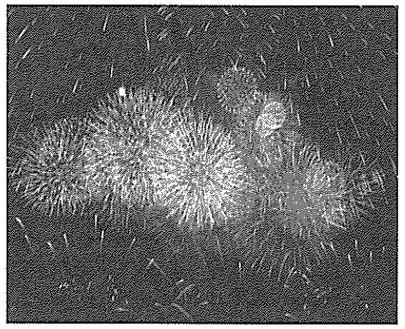
- お互いの国のことを知り、理解し合える機会を今後もつくっていってほしい。
- お金や労力はかかるが、小さな一歩の積み重ねが大切だと思う。
- 民間交流で相互理解が進むことは大変意義深いと感じた。
- 悪いことではないが、７人がLineでつながり、他の家庭の情報が入り、少々驚いた。（本人達はそれほど深く考えていなかったようだが・・・）
- 継続していくことが大切だと思うが、多忙な学校現場の事を考えると数県でローテーションがいいか。

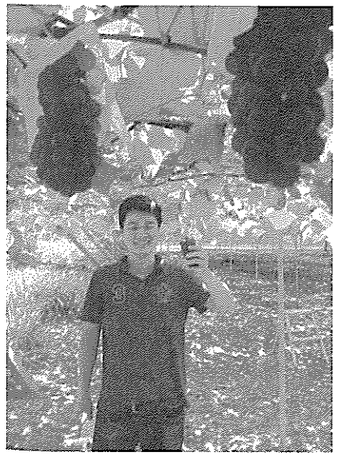
- 翌日、黒田理事長からも御礼の電話をいただき恐縮した。
- 小さな交流かもしれないけれど、少しずつこのような活動を積み上げて、日中の交流が盛んになることを願っています。
- ３日間くらいがちょうど良いのかも知れませんが、慣れ親しんでくると「もっといてほしい」と、思うようになりました。
- 日本の大学に進学する学生がほとんどなので、大学生になったあとに再会したいものです。
- 事前に本人とのやりとりがメールなどで、意見交換ができれば、本人の趣味や興味を抱いていること等に合わせて準備ができたと思う。

（5）留学生報告

忘れられない山梨　　趙　康

８月７日、私がずっと期待していたホームステイがいよいよ始まりました。朝、新宿駅に着いた後、みんな一緒に山梨へ出発しました。電車の中で私はすごく緊張して、落ち着けませんでした。どんな家族だろうか？どうやって交流するか？いろいろなことを想像しました。電車を降りたとたん、心はずっとドキドキしました。そして、駅で初めて中村さんとお子さんの聡太さんに会いました。中村さんの目は、とても優しくて、つい不思議に緊張感が消えました。車の中で自分のことを紹介しました。驚いたことは私のことを全部はっきり覚えられていました。私の胸は喜びがいっぱいに溢れられていました。出てから、居酒屋のような「藍屋」と言う店に行きました。しばらくして店に着き、来日の後ずっと食べたいと思っていた鰻を注文しました。食べながら話しました。私の故郷で一番有名な料理、「沔阳三蒸」を紹介しました。それは魚と肉と野菜三種類の食材を蒸してできたものです。栄養を含んで、健康的な料理です。食事が終わってから、すぐ中村家へ行きました。ドアが開きのままで、「はび」と言う猫を見ました。おもしろくて可愛いです。それから詩乃ちゃんに会いました。笑顔で私とあいさつしました。嬉しくてあまり緊張しませんでした。午後お父さんは私と詩乃ちゃんを、湯之奥金山博物館に連れて行きました。そして、面白い砂金採り体験しました。金を採るために、専門の器を使わなければならないで、砂と金の重さが違う点を利用して、砂の中で金を採取しました。詩乃ちゃんはすごく上手でたくさんの砂金を採りました。とても楽しかったです。この後、家に帰って聡太さんの作ったほうとうを食べました。次、聡太さんは一番食べたい焼き鳥を作ってくれました。ありがとうございます。すごく楽しいでした。





食事の後で私は聡太さんと詩乃ちゃんと一緒に「手役」と言うカードゲームで遊びました。奥さんと聡太さんと詩乃ちゃんはゆっくりゲームのルールを説明してくれて、本当に優しい家族だと思っていました。その後、中村さんとビールを飲んでいろいろことを話しました。お母さんは寝る前にお茶を用意してくれて、お茶を飲みながら心も暖かくなってきました。

翌日の朝、富士ビジターセンターに行き、見学しました。いろいろ富士山についての事を勉強しました。バスに乗って、富士五合目に到着しました。今日の空は曇があまり多くなくて富士山が見えました、とても壮観で、空気と景色がとてもいいです。まるで人間仙境です、さすがに世界の山です。まもなく、鳴沢氷穴に行きました。これは不思議な天然氷でできた長いトンネルです。観光客がすごく多くて、驚きました。それから、みんな一緒

に石ころ館に宝石をすくい取りました。奥さんに、石ころ館のお土産を贈ってあげました。家に帰って、私と詩乃ちゃんはすくった宝石でブレスレットを作り始めました。とてもきれいなブレスレットを作り、すごく楽しかったです。奥さんの美味しい手作り料理を食べた後、花火大会を見に行きました。終わる前に、最高のシーンを迎えて、この素晴らしさは心に刻まれました。後は車で一緒に温泉に行きました。初めて温泉に来て、すごくわくわくしました。さらに露天風呂に入ると、山梨県すべての景色が見えました。山梨県の夜景は非常に素晴らしいです。涼しい風に吹いて、気持ちはすごく快かったです。

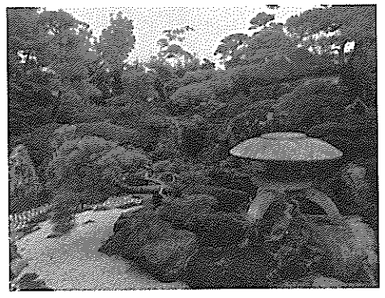
三日目の朝、６時に起きました。中村さんは私を桃を摘むのに連れて行きました。そこで中村さんの両親に会いました。両親たちはとても元気そうでした。おじいさんは私を桃の畑に連れて行って、どんな動物が桃を好きか教えてくれました。それに、一緒に桃を摘んで、とても体験し甲斐がありました。家に帰り、幸せに浸ったまま寝ました。８時に起きて、朝食を食べました。９時ぐらいに、奥さんの実家へ葡萄と梨を摘みに行きました。もちろんとても美味しい葡萄と梨を食べました、国内の果物よりもっとおいしいです。この後の目的地は科学館でした。いろいろ今まで見たことないものを見ました、気持ちは言葉で言えませんでした。詩乃ちゃんと一緒に楽しく遊びました。

楽しい時間はいつも短いです。この三日間で本当にいろいろ勉強になりました。日本の文化を深く感じました。今回のホームステイはもう終わりました。みんなは駅で手を振って別れしました。巡り合いなら、いつかさようなら。悲しいですが、本当に楽しかったです。私は日本語があまり上手ではないので、中村家のみんなはいつも優しく説明してくれて本当に感謝しています。また、日中国際教育交流協会にフジ国際語学院にも感謝します。この機会を与えてくださってありがとうございました。三日間、まるで実家に帰ったような気がしました。家族のように世話をしてくださって、とても幸せでした。本当にありがとうございました。

楽しかった三日間　　范　玉佳

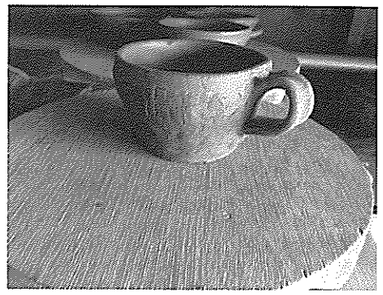
時間の過ぎるのは本当に速いです。楽しくて、わすれられないホームステイの三日間は、もう終ってしまいました。今、感動したこと、惜しいこと、残念なことなどすべて私の心の中深くにあります。

私は、今までホームステイを経験したことがありませんでしたから、最初は少し緊張していました。私は、日本語の聞き取りに自信がありませんでしたから、大体何分ぐらいの程度が聞いてわかるか、日本の方と普通のコミュニケーションができるかどうかと心配して、ちょっと不安でした。でも、服部さんに会ったとき、その不安感が少しなくなりました。この方は優しい顔をしていて、きっといい人だと思いました。



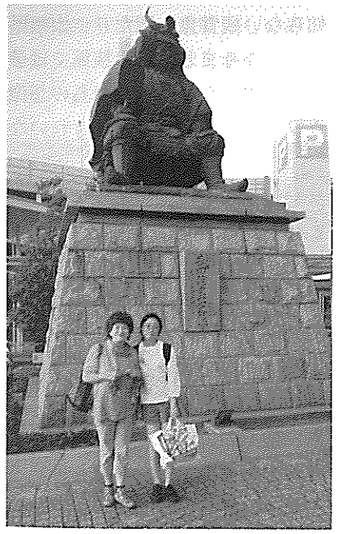
最初、服部さんは県立図書館で働いていると言い、私を図書館へ連れて行ってくださいました。図書館に入って、びっくりしました。こんな観覧エレベーターがある図書館を私は初めて見ました。すごく立派な建物だと思いました。漫画がある本棚へ行きました。私、宮崎駿さんの作品が好きだと服部さんに言って、そして、服部さんと一緒に座って、本を見ました。私が宮崎駿さんの作品の中で、一番好きなのは『もののけ姫』です。人と自然についての物語で、何度この映画を見ても、飽きません。本を見た後で、図書館にある教室に入って、お婆さんたちが新聞紙で作った素敵な扇子を見ました。服部さんは私を

皆さんに紹介しました。皆さんがたくさんのお菓子を私にくださいました。私は、「ありがとうございます。」と言いながら、皆さんは本当に親切な人たちだと思いました。その後、服部さんが私を連れて、山梨県立美術館へ行きました。フランスの有名な画家ミレーの作品や同じ時代の画家の作品を見たり、日本で有名な画家荻原英雄さんの作品も見学しました。なんか、自分の情操が薫陶されたと思いました。



服部さんと一緒にアイスクリームを食べた後で、家へ帰りました。お爺さんと３人で一緒に車で近くのスーパーでいろいろな食べ物を買いました。服部さんは私に「牛丼は好きですか」と聞きました。「黒毛和牛」を買いました。私はこの牛肉の名前を以前に聞いたことはあるのですが、食べたことはありません。確か「世界ですべての美食家に一番豪華な味蕾の享楽」と言います。私は、服部さんが黒毛和牛で作った美味しい料理を食べられるのは、本当にラッキーだと思いました。夜、服部さんとJazz Dance教室へ行きました。AKB48の歌を聞きながら、皆さんと一緒に踊りました。少し疲れたけれど、楽しかったです。夜ご飯を食べながら、お爺さんからいろいろな中国についての話を聞きました。お爺さんが中国のことをたくさん知ってるのには、びっくりして、敬服しました。

８日、朝「原爆と人間」パネル展に行きました。被爆者の証言と写真を見たら、人が核兵器に直面する時、命はこんなに小さくて、戦争は本当に残酷だと思っています。その後、中国文化研究所へ行って、犬飼和雄さんを訪問しました。小さな部屋の中にいろいろな中国の文化財、歴史についての書類などが置いてあり、びっくりしました。帰るときに、犬飼さんは私に『CARAVAN』と言う本を私にくださいました。今は私の日本語はまだまだですが、でも必ず拝読します。昼ご飯は「不動」と言う、中国では、布団と言う食べ物を食べました。その後、西湖に行って、富士山を見に行くつもりでしたが、曇りなので、全然見ず、残念でした。でも、西湖の綺麗な風景を見て、満足しました。そして、私たち久保田美術館へ行って、着物を見た後、「竜」に行って、初めてフランス料理を食べました。料理も美味しいし、環境も綺麗いで、本当にいいレストランだとおもいました。夜、11時まで、私はお爺さんと「峨眉山」の観光ＤＶＤを見ました。



時間がたつのが速くて、もう10日になりました。朝、お婆ちゃんを訪問した後、「柚木窯」で陶器を作りました。子どもの時作ったことがあるんですが、もう作り方は全部忘れていました。服部さんを見て、素晴らしい人だと思いました。料理も上手だし、工芸もできるし、それに、Jazz Danceも踊れます。私、服部夫婦にあって、本当によかったと思います。それに、この三日間で、山梨県の美しい景色を見て、いい人達に会って本当に良かったです。私は絶対にいつかもう一度山梨県へ来ようと思っています。

子どものように　　葛　世明

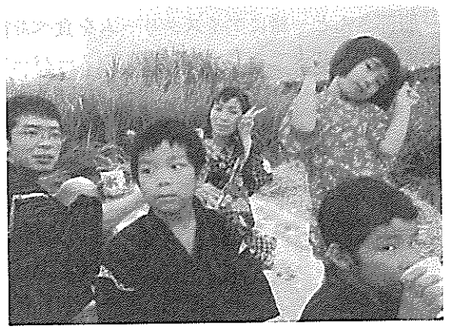
日本に初めて来た留学生として、私にはたくさん知らないことがありました。三日間のホームステイは私に日本の生活を深く理解させてくれました。

改札口を出ると、皆さんが私たちを迎えてくれました。業務執行理事赤岡さんの紹介で、私はホームステイのホスト，順哉さんに会いました。順哉さんと奥さんの美香さんは子どもが３人いました。お兄さんの文君と友君と妹の千ちゃんです。３人は私を恐れていないで、あいさつをしてくれました。私も笑顔でみんなとあいさつをしました。

初日、武田神社に行きました。順哉さんが教えてくれたとおりに、私は手水舎で手を洗って、口を清めました。そして、鈴を鳴らって、五円を賽銭箱に静かに入れて、一拝と二拍手をして、合掌のときに神様に祈願して、最

後、深く再拝しました。それで、参拝が終わりました。とても荘厳な儀式と思いました。

回転寿司を食べに行きました。天ぷらがおいしいので、たくさん食べましたが、子どもたちは私より多くを食べていました。そして、順哉さんの家に行って、花火大会に行く準備しました。初めておにぎりを作ったり、飲み物を一緒に買ったりしました。準備が終わって、私は順哉さんと文君と友君とバスケットボールをしました。友君はバスケットボールがとても上手でした。さすが学校のバスケットボール部の一員だと思いました。浴衣に着替えて、花火大会に行きました。



今年は「神明の花火大会」が10周年だそうです。祭りで遊んでいると、19時半、花火が時間通りに始まりました。日本の花火は、どこから見ても円形です。そして、中国より形が大きいし、音も大きいし、すばらしいです。その音は心を震ったので、写真じゃなくてビデオを撮ったほうがいいと思いました。

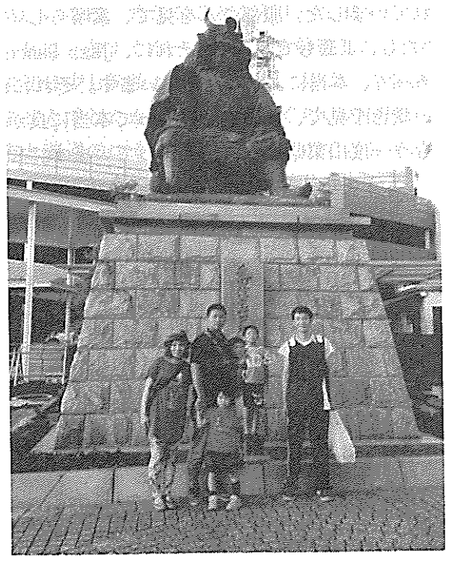
二日目、順哉さんの友達の子ども、絢ちゃんと、全員で４人の子どもが河口湖猿まわし劇場に行きました。猿に餌を与えて、猿の公演を見て、子どもたちが可愛い猿と写真を撮っている時、私は猿がちょっと可哀相かもしれないと思いました。でもとにかく、子どもたちはとてもうれしがっていました。

その後、河口湖を通過しました。雲が多かったので、富士山が見えなくて残念でしだ。次の観光地、忍野八海は世界文化遺産の一つでした。これは八つの形が違う池で構成されていました。それぞれに独自の特性がありました。池の水は富士山の雪が融解したもので、手を入れたら体は富士山の頂点にいるように寒かったです。

近くでおそばを食べました。富士湧水の里水族館にも行きました。いろいろ知らない観賞魚を観たり、山梨県でよく見られる魚を紹介する映画を観たりしました。異なった魚が区別できるようになりました。水族館では子どもたちが装飾品を作るために、貝殻や玉石やマーカーや接着剤などを提供してくれました。子どもたちの想像力は素晴らしいです。友君と絢ちゃんはかめ、千ちゃんはイカ、文くんはカワウソを作りました。全部きれいな装飾品でした。

次に、鳴沢氷穴へ行きました。これは数百年前に富士山が噴火するとき、マグマの中の木が気化して形成した洞窟です。一番深いことは０℃でした。深ければ深いほど、暑い夏が嘘になりました。最後には、世界には氷があるだけ…。薄暗い光で、私は桃源のように感じました。晩ご飯の後で、みたまの湯へ行きました。お湯に入って、１日の疲れが全部消えました。

最後の日、私達は吐竜の滝に行きました。川がまだ見えないのに、水の音が雷のように先走っていました。歩き続けると、目に映るのは白雪のような流水でした。子どもたちは次々と靴を脱ぎ散らし、川に飛び出しました。私も彼らに影響されて、仲間に入りました。遠くの山から流れた水が足を冷たく刺激して、私は自然に融けこんでいました。そして私達は吐竜の滝から出て、清泉寮に向かいました。ここのソフトクリームは八ヶ岳の水で出来ていると聞きました。ソフトクリームを食べて、ホームステイの最後の時間が夏の暑さとともに消えてなくなっていきました。



午後、お別れの時が来ました。記念に順哉さんの家族と写真を撮りました。そして、その後は独りで帰り道を…。

この三日間で私はたくさんのことを知り、深く感動しました。順哉さんと美香さんは優しい人でした。私の日本語が未熟なため、多く時に、残念ですが、彼らの言ったことがよく理解できませんでした。でも彼らはいろんな手を使って、私と話をしてくれました。最後に私は、この機会を与えてくれた日本中国国際教育交流協会と学校、そして私を受け入れてくれた順哉さん一家に深く感謝したいと思います。

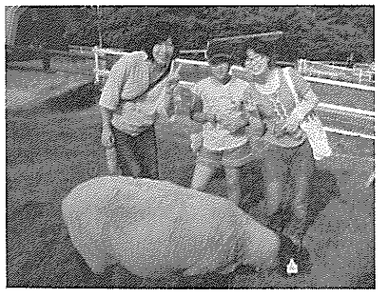
最高の夏

戴　雨桦

８月７日、興奮と緊張の気持ちを抱いて、甲府行の電車に乗りました。その日はいつもより早く起きて、少し眠かったけど、着いた時に無口にならないように、車内では山梨について資料を調べました。甲府駅に到着すると、ホストファミリーの皆様は、歓迎の言葉を書いた横断幕を持って改札口で待っていてくださいました。私のホームステイ先の家族新海さんご夫妻と姪の美海ちゃんが、駅に迎えに来てくれました。初めて会った時はとても緊張して、準備しておいた話題は全然役に立たなくて頭が真っ白になりました。その時千文さんが私に微笑んで「大丈夫ですよ、緊張しないで、リラックス、リラックス。私を千文ちゃん、旦那を新くんと呼んでいいですよ」と言ってくれて、私の緊張した気持ちが少しほぐれました。そして私を車に乗せて、途中の景色を楽しみながら武田神社へ向かいました。車の窓を下げて外に顔を向けると、清新であっさりとした葉っぱの匂いが、顔に向かって来ました。外の風景は東京と違って、目が届くところすべてが緑でした。うねりながら長く続く山並みの下、水田の中に柔らかい稲の苗が風に揺れていました。そんなに美しい自然の風景を見て、自分がその一部分になりました。

知らず知らずのうちに武田神社に着きました。神社への参拝は初めてなので千文ちゃんは正しい作法を私に気長に教えてくれました。そしておみくじを引いたら大吉だったので、とても嬉しかったです。

神社から出て、素晴らしい寿司屋に昼ごはんを食べに行きました。様々な海鮮があってご飯も軟らかくて回転寿司よりずっと美味しかったです。以前にインターネットで調べた資料によると、日本では食事を残すのは、マーナー違反だそうです。出来るだけ頑張って食べましたが、量が多すぎてなかなか食べきれませんでした。その時、新くんが「無理しないで、残しても大丈夫ですよ」と優しく言ってくれたので、私は本当に感動しました。



食事が終わったあと、山梨県立まきば公園へ向かいました。途中みんなでいろいろな話をしたので、とても仲良くなりました。千文ちゃんの姪である美海ちゃんはとても明るくて可愛い子でした。彼女は学校の事やおばあちゃんとの面白い話を私に教えてくれました。新くんが車を運転し、富士川を通った時、私達は山梨県の地理についていろいろ勉強しました。美海ちゃんは「釜無川」と言う漢字を書いた時「釜」を「金」に間違ってしまいました。本当に面白かったです。

私のパーソナルデータに「花火を見たい」と書いてあったから、新海ご夫妻は夜に長時間車を運転して私を神明の花火大会に連れて行ってくれました。そのやさしさに本当に感激しました。大地を揺り動かすほど大きな音に伴って巨大な菊形の花火が夜空に咲いて、あっという間に散って、残ったのは星の塵のような光でしばらく輝いていて、また一瞬に消えていきました。強い感動を受けました。ついに人生もそうだと思って、人間に与えられる時間に限りがあって、だからこそ私たちが限られた時間に自分の価値を実現するべきなんだと思いました。ちゃんと咲いたから、散っても後悔はしないと思いました。花火を満喫したあと、ホストファミリーに帰りました。疲れたので、夜はぐっすりと寝ました。

二日目は天然記念物である鳴沢氷穴と風穴に行きました。穴の中の氷がガラスのように透明で、光に当たるとキラキラとひかっていて、とても綺麗でした。すこし残念だったのが、その日の天気は曇りだったので、富士山は雲に隠れて見られなかったことです。

昼食は富士山麓で山梨県の郷土料理であるほうとうを味わいました。ほうとうはうどんと似ていましたが、味はうどんより濃くて、腰があって、とても旨かったです。ほうとうは美味しいだけではなく、長い歴史も持っています。ほうとうは元々中国の伝統的な食物

の一つだったようです。中国が唐の時代、汁に入れた麺を「不托」と呼び、その食物が日本に伝わって、「饂飩」と名づけられたそうです。

ご馳走になった後、なかとみ和紙の里で紙漉きを体験しました。和紙は戦国時代から現代に伝わる日本の伝統工芸です。現代人としての私はこんなに古い工芸品を作ることもでき、本当に不思議でした。

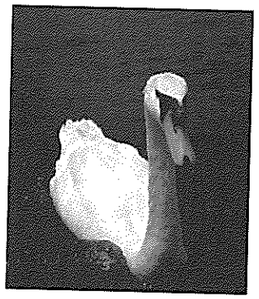
私がどうしても富士山を見たいと言ったので、三日目みんなは朝早く起きてくれて富士山を見に行きました。その時水蒸気はまだ上がらなかったので、富士山の麓にかいまき笠雲があって、絶景でした。新海ご夫妻が、前の日に富士山をはっきり見る方法を調べてくださったおかげで、富士山が見えてほんとうによかったです。

楽しい三日間はあっという間に過ぎてしまいました。今年の夏はこんなに特別な三日間があって輝いていました。ずっと記憶に残るのは、山梨の綺麗な景色だけではなく、新海ご夫妻の優しさもずっと忘れられないと思います。一緒にいた日は僅か三日間でしたが、私に家族のような暖かさを与えてくれて、本当に感激しました。今回の体験を通して、愛に国籍の壁がないことが分かりました。中国と日本の人民は地域が違って、話す言葉が違っても、お互いに仲良くして、楽しい生活を送りたい気持ちは一緒です。ですから、お互いの交流を深めて、理解を深めれば、日中友好はきっと長く続くと思います。

別れは会いの始め

赵　元玮

「会うは別れの始め」ということわざがあるというものの、逆といえば、別れも次の会いの始めじゃないのだろうか。

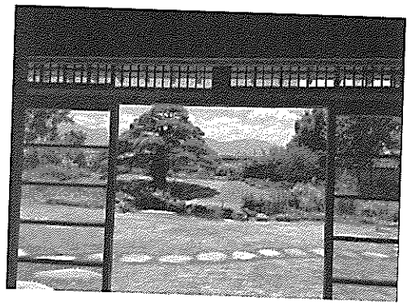


「ドキドキ…」と心臓が激しく打った。「ホストファミリーはどんな家庭だろうか、みんなは親切か、付き合いにくいか」と、心配した。人間関係が苦手の私にとって、今回の活動は大きな挑戦に相違ないが、コミュニケーション力を鍛えることに対し、いいチャンスだと思ったから、参加することにした。でも、不安な気持ちはずっと持っていた。しかし、そんな不安な気持ちが、梶原夫婦と知り合うにつれて、だんだん消えていった。

最初は、喫茶店で簡単に挨拶し、それから、自己紹介の表に絵画が好きだと書いたから、梶原さんと裕子さんは特に私を山梨県立美術館に連れて行ってくれた。そこで、ミレーの画と印象派の画をしっかりと鑑賞した。作品の解説もいっぱい読み、すごく満足した。こんなに私のためを思ってくれている梶原さんと裕子さんと出会い、本当に感動した。そして、これから三日間のホームステイが始まると感じた。

昼ご飯を食べた後、梶原さんの家に向かい、家で梶原さんの次男に会った。そして、少々休んだ後、ワイン工場へ見学に行った。工場でワインの作業手順を了解し、様々なワインも飲んでみて本当に楽しかった。でも、その一日中、一番記憶に残ったのは、やはり晩御飯の時、自分で手巻きずしを作ったことだ。ずっと前から、これをやってみたかったが、何時もできなかった。今回は初めだから、すごく興奮した。夜、梶原さんの長女遥ちゃんと三男大河君も帰ってきた。みんな親切だが、忙しいので、一緒に遊べないのは、ちょっと残念だと思った。

二日目、朝、和式の朝ご飯を食べた後、山中湖に向かって出発した。途中で富士急ハイランドの姿が少し見えた。でも、残念だが雲が多すぎるので富士山が見えなかった。そして、間もなく山中湖に到着した。私たちは白鳥のような小舟に乗り、湖に漂った。湖面の上に風が吹いていた。風が軽くて柔らかい。とても気持ちがよかった。突然、一群のハクチョウが、私たちに向ってきた。たぶん餌がもらえると思ったのだろう。ハクチョウたちは、落ち着いているような小舟をまわって、自由に遊んだ。そして、わたしたちは地面に戻った後、すぐ花の都公園に向かって行った。公園に向日葵がいっぱい咲いている。花畑の中を歩くと、気分も明るくなった。午後、梶原さんは都留市にある実家に私を連れていってお抹茶体験をさせてくれた。そこのお茶室でわたしはお菓子をいただき、茶道の手続きを楽しみ、日本茶道の歴史を伺い、茶道について、様々な簡単な知識を学んだ。帰るとき、いろいろな迷惑をかけたのに、またプレゼントをもらった。ほんとうに感謝した。晩御飯は梶原さんの家族と一緒に面白い流しそうめんを体験した。それに、食べ方が上手だと褒められたから、すごくうれしかった。食事の後、ぷくぷくの湯にいった。そして、あの日一番ラッキーなことは、温泉に入ったとき発生したことである。ぷくぷくの湯は新日本の三大夜景と呼ばれる笛吹川フルーツ公園の近くにある。そのため、露天風呂から綺麗な夜景が見える。夜景を見るため、露天風呂に入ったのに、ちょうどその際、遠くで花火が始まった。因って、驚いてたまらなく興奮した。裕子さんから、あの花火は誰か結婚するときだけあげるのだと聞いた。あまり温泉に入らない私たちにとって、今回のことは非常に珍しい経験だった。元の計画により、お風呂の後は笛吹川フルーツ公園で夜景や花火を見たりするつもりだったが、花火が意外に早く終わったので夜景だけ見た。夜景がとてもきれいだが、携帯でよく撮れないから、ちょっと残念だと思った。今度、きっといいカメラを持ち、また公園に行きたいと思った。



最後の日、朝ご飯を食べた後、近所の桃畑へ桃狩りに行った。畑のおじさんはすごく心をこめて私たちを接待し、赤くて甘い桃を食べさせてくれた。さらに、私が自分でとった桃を、プレゼントにして贈ってくれた。本当にやさしいおじさんだと思った。それから、ワイングラス館に、グラス作り体験に行った。さらに、梶原さんと裕子さんは、わたしが建築設計に興味があると考えたから、わざわざ根津記念館に連れて行ってくれた。根津記念館は鉄道王と称された実業家初代根津嘉一郎の実家であるので、そこに鉄道局に関するものがたくさんある。それだけでなく、記念館で日本の伝統的な古い建築構造も見たし、和式の庭園も見た。したがって、心から満足した。

別れはどうしても避けられなかった。悲しい、でも本当に感謝した。今回の活動を通じて、様々な知識を学び、見聞も広がった。それはみんなのおかげだ。特に公益財団法人日本中国国際教育交流協会とフジ国際語学院に、今回のチャンスを与えてくれたことを感謝する。また、梶原さんと裕子さんに「この三日間いろいろお世話になりました。本当にありがとうございました！私は夢のために、優秀な留学生になるために、頑張ります!!」と言いたい。ただし、私はずっと「別れは会いの始め」と信じているから、絶対にいつかどこかでまた会えると思う！

素晴らしい三日間

周　凌杰

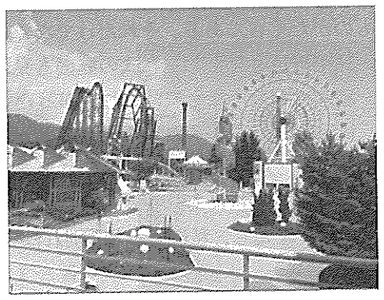
いい文章を書きたいです。しかし、日本語はあまり上手くないです。申し訳ございません。絶対に早く日本語が上手くなります。

７月に事務所の先生は「日本人の家へ行って、ホームステイする？」と言いました。本当にうれしかったですが、実はちょっとどきどきでした。「どんな人かな？」「日本の礼儀がよく分からないけど…どうしよう。」「日本語が上手じゃないけど…会話は難しいかな。」いろいろなことが心配になりました。

とうとう８月７日になりました。当日、ほかの６人と一緒に特急で甲府駅へ向かいました。一時間半の後、甲府駅に着きました。ホームステイを受け入れてくれる日本の方がみんなでもう待っていました。本当にびっくりしました。みんなはとても熱情でした。そして、自分のホームステイ先のホストファミリーを探しました。私のホストファミリーのご主人の志村さんが私を見つけてくれました。「きっと親切な人だろう。」その時私はそう思いました。そして、三日間の山梨ホームステイが始まりました。

山梨県での初めてのご飯は、中華料理でした。志村さんはとても客好きです。料理をたくさん注文しました。お腹がいっぱいになりました。日本の中華料理は中国のとはちょっと違いますが、とても美味しかったです。昼ご飯が終ってから、観光地100選渓谷の部第１位の「昇仙峡」へ行きました。続いている山々とたくさんの緑の木々は本当にきれいでした。山の上にも素晴らしい眺めがありました。しかし、曇りでしたから、富士山は見えませんでした。ちょっと残念でした。その後、志村さんの学校へ行きました。初めて日本の小学校へ行って、深い印象が残りました。私にとって最も印象が深かったのは、日本の小学校には全部プールがありました。それは意外でした。正直、中国の小学校にはプールがないです。それから、温泉行きました。たいへん気持ちがよかったです。露天風呂のきれいな眺めと暖かいお湯、最高でした。温泉は４時半までででした。その後、志村さんの家へ行きました。ものすごく大きい家でした。志村さんの奥さんを見ました。奥さんは親切で、きれいな人でした。可愛いワンちゃんもいました。名前は茶々、大好きになりました。晩ご飯は美味しい四川料理でした。日本でも美味しい中華料理が食べられます。本当にうれしかったです。８月７日は神明花火大会でした。もちろん行きました。志村さん夫婦と私と茶々はある静かな道で花火を見ました。ほかの日本人のみんなさんも地に座って、お菓子を食べて、家族や友達と一緒にきれいな花火を見ていました。本当に最高の日本の夜でした。

二日目、８時に起きました。早かったです。その日は、私が一番楽しみにしていた富士急ハイランドへ行くことになっていました。まず、初めて日本の朝ご飯を食べました。とても素敵でした。私は、日本でも中国でも朝ご飯はいつも簡単です。時々食べません。こんな精緻な朝ご飯はひさしぶりでした。朝ご飯を食べてから、車で富士急ハイランドへ行きました。大体１時20分ぐらいかかりました。富士急ハイランドへ行って、まず一番おもしろいアトラクション---FUJIYAMAで遊びました。乗る前に、気持ちが悪くなって吐いたら…と、心配しました。しかし、遊びが終って、全然吐き気はなく、気持ちが良かったです。最高でした。その後もいろいろなアトラションにチャレンジしました。その中で一番怖かったのはお化け物屋敷「慈急総合病院」でした。入るとき、ほかのみんなは二人、私だけは一人でした。とても怖かったです。午前８時から午後４時まで遊びました。疲れたけれど、でも楽しかったです。家に帰って、１時間休みました。志村さんの息子さんと息子さんの奥さんに会いました。息子さんは以前厦门と台湾へ旅行したそうです。私も中国のことをたくさん紹介しました。その後で、みんな一緒に焼き肉を食べに行きました。私は焼き肉が大好きです。東京でもよく焼き肉食べ放題に食べにいきました。今日の焼き肉もとってもうまかったです。夜中に、ワンちゃんの茶々は、時々私の部屋へ入ってきて、私と一緒に寝ました。本当に可愛かったです。



最後の日、山梨県立美術館と甲府城へ行きました。芸術と歴史を賞美しました。そして、甲府城で富士山を見ました。最高でした。うれしかったです。その後、志村夫婦にプレゼントとお土産をたくさんもらいました。本当に感謝しました。午後はほかのホームステイのみんなさん一緒に、この三日の感想を発表しました。みんなの経験もおもしろかったです。発表が終って、甲府駅へ行って、特急で新宿へ帰りました。三日間の山梨での生活が終わりました。しかし、本当は終わらないと思います。大学へ行ってから、絶対にもう一度志村夫婦の家を訪ねたいです。甲府は綺麗だし、静かな町です。生活がしやすいところです。この三日間は、とても素晴らしかったです。志村夫婦、本当にありがとうございました。

古屋さんの皆様、ありがとう！

楊　雨泓

甲府への電車の中で、ホームステイに参加する私たちは、とても緊張していました。「この三日間がどのようになるのか。」とか、「相手の家庭はどんな家庭なのか。」とか、「わたしの日本語は大丈夫だろうか。」とか、いろいろ考えました。リラックスするために、わたしは日本語の曲を聞いていました。一時間くらいすると、窓の外の景色が全部変わりました。東京の景色とはぜんぜん違います。道沿いの建物は多くなかったです。山が私たちを取り囲みました。まわりはうねりながら続く山並みでした。このような景色を初めて見たので、わたしは驚きました。でも、なんとなく、楽になりました。

初めて古屋さんと会ったとき、わたしはドキドキしました。笑いながら、わたしに「初めまして」と言ってくれた古屋さんはとても優しかったです。奈保ちゃんはその時古屋さんの左に立っていました。多分彼女も緊張していたようで、何時もの彼女の声よりずっと小さな声で挨拶してくれたようでした。でも、すっごく可愛いかったです。わたしは、心が温かくなってきました。

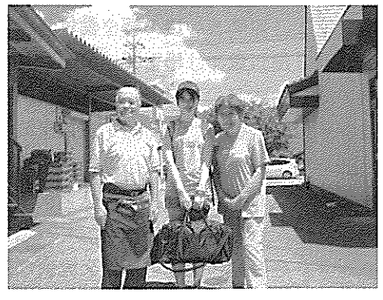
この三日間、わたしはいろいろな新しいことを体験しました。花火大会を見るとか、浴衣を着るとか、富士山へいくとか、茶道とか、ほうとうを作るとか、冷たいうどんを食べるとか、いっぱいありました。花火と富士山がきれいだったし、抹茶とうどんが美味しかったし、今度のホームステイはすっごく楽しかったです。これらはぜんぶ私の人生の中で忘れがたい思い出です。でも、一番忘れがたいのは、やはり花火大会です。わたしの故郷では汚染が原因で花火は禁止になっています。ですから、あんなに沢山の、素晴らしい花火は初めて見ました。ほんとに感動しました。

わたしも外国の学生がわたしの家で「中国の生活を体験する」という経験があったので、そのなかの大変がよくわかります。毎日のプランをしっかり整理して、どうやって相手に自分の国の特別なところと文化をできるだけ表すのかをよく考えて、すごく難しかったです。わたしは、今度のホームステイのおかげで、本当の日本を知りました。「日本人たちはとても親切だな。日本人の生活はとてもおもしろいな。」という感じがしました。

日本に来たばかりなので、わたしは日本の生活にまだ慣れていません。そして、東京の生活は大変厳しいですから、ちょっと不安と嫌な感じがしていました。でも、古屋さんの皆様のおかげで、日本がだんだん好きになりました。

優しい修宏さん、何でもできる朝子さん、元気満々、歌うことが好きな奈保ちゃん、熱心なたかし君、いつもにこにこしている親切な祖父母がいてこのような完璧な家族で生活している、みんなはきっと幸せだろうと思います。三日間は短かったけれども、わたしはとっても幸せでした。わたしはみんなにとって、もともとストレンジャーにもかかわらず、みんなとっても珍しい思い出を作ってくれて、わたしは心から感謝しています。

わたしは日本語があまり上手じゃないですので、みんな優しく、ゆっくり話してくれました。理解しやすく説明してくれて、ありがとうございました。みんなのことが絶対に忘れられないです。みんな、お元気で。また会えますように。今、わたしは、東京で一生懸命頑張っています。日本のいい大学に入れるように、努力しています。次回みんなと会うときには、わたしは絶対に日本語を話すことが上手になっています。



別れはどうしても避けられません。ちょっと悲しかったです。最後に、もう一度古屋さんの皆様にお礼申しあげます。この三日間、いろいろお世話になりました。ほんとにありがとうございました！